霊界戦争
EP.
3
日本卍リベンジャーズ
与国 秀真
YOKUNI Hotsuma

私が十代だった90年代、
渋谷や六本木を中心に、
都会の色香に惹かれて、
多くの若者が集まった。

モデルしてる奴、
歌手を目指してる人、
ヤクザになった者、
なんだかオシャレ・・・、

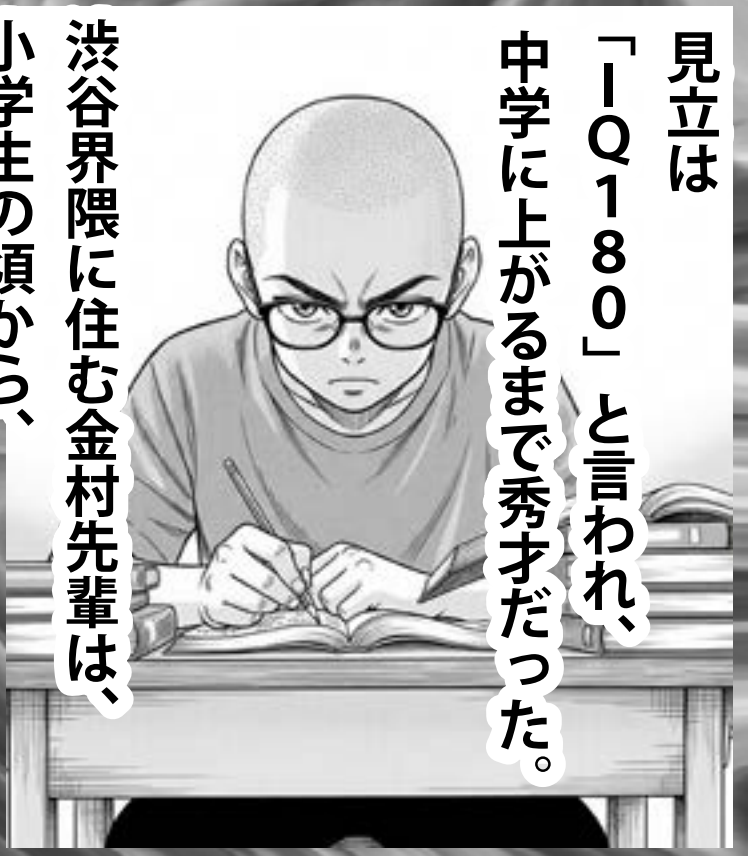
格闘家、
ジャンキー、
暴走族、
チーマーなど、
本当に
色々なヤツがいた。

世の中には、
甲子園を目指して、
白球を追いかける
青春もあるし、

受験勉強に情熱を燃やす
青春もあるけど、

私たちは変わった、
そして狂った青春時代を
過ごしてしまった。

なぜなら
喧嘩に最大の価値を
見い出してしまったからだ。



見立は
「IQ180」と言われ、
中学に上がるまで秀才だった。

渋谷界隈に住む金村先輩は、
小学生の頃から、
自転車をこぎながら、
筋トレに励み、、

「変わった小学生」として、
近所でも有名だったらしい。

私は小さい頃、
虫も殺せず、
上級生から
イジメられ、
泣かされる
弱虫だった。

だがサッカーを
はじめて、
友だちができて、
体力もつくと、
いつしか
イジメられなく
なった。

そして小学校も高学年
になると、
漫画や映画の影響も
あってか、
次第に「喧嘩」という
暴力に
価値を見い出して、
「強さ」に憧れた。

あの当時、日本中の多くの中高生の不良少年が、「喧嘩」に価値を見い出していた。

そのために、日本中の不良少年たちが、なんとなく「敵」に見えた。

本当に狂った時代だった。

だから中学に上がると、喧嘩に強くなるために、ベンチプレスに励んだ。

本格的にやってる人に比べれば大したことないが、中学三年で100キロ上げた。

くだらないことに、
こうして私たちは、
喧嘩の世界に
深く没入していった。
本当にバカだ！
そしてあれは、
中学三年の夏だった。
隣町の不良少年たちが、
２０校くらい集まって、
『杉並連合』なんて
ものをつくって、
４０人くらいで、
私たちの中学に
攻めてきたのだ。
こちらは５人くらいしか、
戦える仲間がいなく、
ちょっとピンチだった。

十五歳の私たちは、
それを迎え打つわけだが、
しかし考えて欲しい。

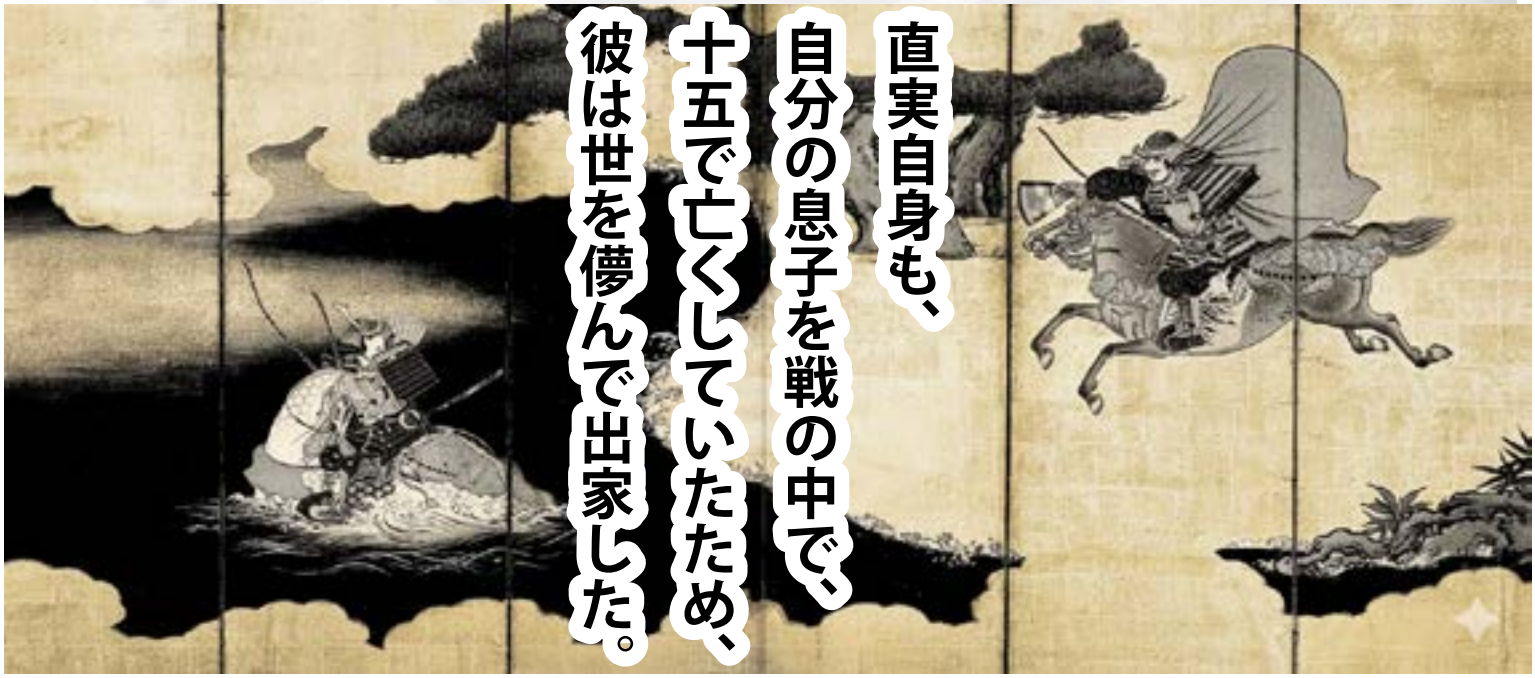
かつて日本では、
「元服」と言って、
十五歳前後で
成人の儀式を行った。

かつての日本男児は、
十五歳で命を懸けて、
天下国家のために戦った。

たとえば
戦国武将の織田信長は
幸若舞『敦盛』を好んだ。

人間五十年
下天の内をくらべれば
夢幻の如くなり
一度生を享け
滅せぬもののあるべきか

源氏と平家が争った
『源平合戦』の中で、
平敦盛が熊谷直実に
首を討たれたのは、
わずか十五歳だった。



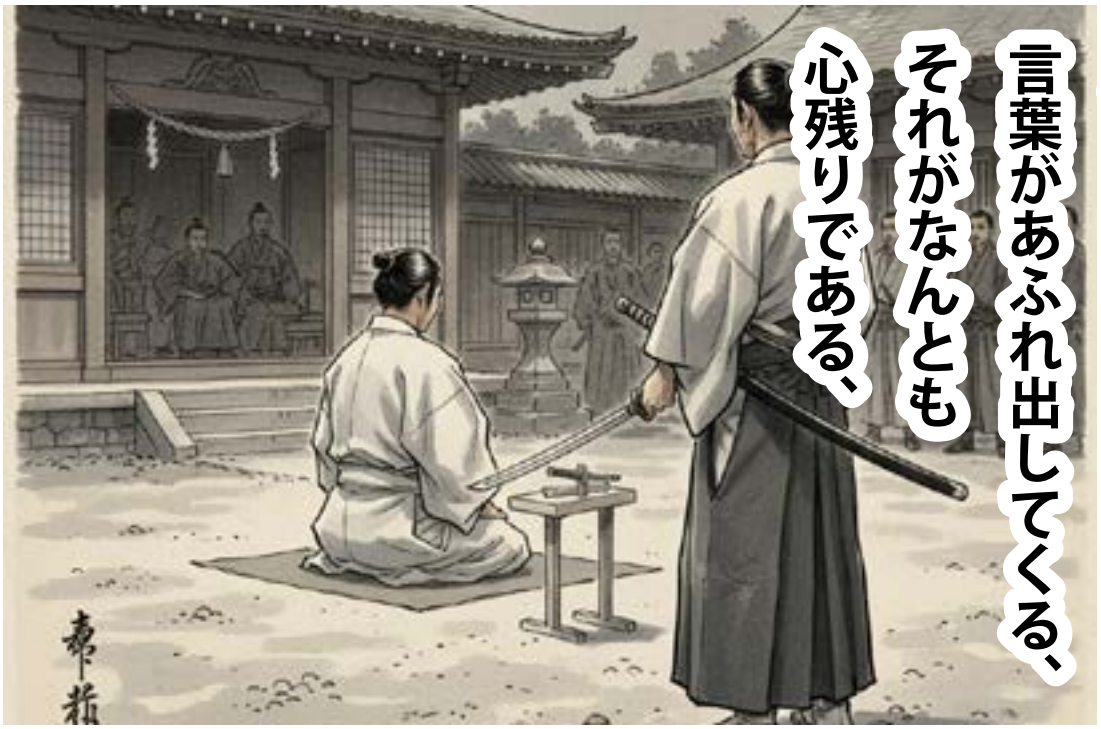
直実自身も、
自分の息子を戦の中で、
十五で亡くしていたため、
彼は世を儚んで出家した。

僧侶になった彼が、
『敦盛』を詠み、
そして信長が
その『敦盛』を
好んだわけである。

また大石主税が、
父・大石内蔵助と共に
主君への忠義を貫き、
吉良邸に
討ち入りを果たし、
切腹して果てたのも、
やはり
わずか十五歳だった。

当たり前のように、
毎日顔を合わせていた
時には、
もう十分に語り尽くしたと
思っていたけれども、

しかしいざ別れとなり、
これを最後に
もう会えないと思うと
胸がいっぱいとなり、
言葉があふれ出してくる、
それがなんとも
心残りである、



そう詠んで十五歳の若さで、
大石主税は割腹して果てた。

幕末の思想家にして侍の
橋本左内も若干十五歳にして、
『啓発録』の中で
「稚心を去れ」と述べた。

「稚心」とは
幼稚な心のこと。

申し訳ないが、
十五歳の私は、
稚心にあふれていた。

私は今でも
尾崎豊は好きだが、
しかし彼は『15の夜』や
『卒業』という曲の中で、
「盗んだバイクで走り出す」とか、

「夜の校舎窓
ガラス壊して回った」
と歌っている。

同じ
「日本人の十五歳」
なのに、
この「違い」は
果たして
何だろうか？

『塀の中の懲りない面々』
などの映画や小説で、
お馴染みの作家の安部譲二氏は、
小学校の頃は
「神童」ともてはやされ、

有名進学校『麻布中学』
に進学するも、
一流進学校の勉強についていけず、
成績は４５人のクラスの中で
３８番だった。

「ああ、オレは劣等生なんだ。
オレの後ろには
たった7人しかいないのか。

そのように劣等感に
苦しんでいたら、
その彼の後ろの中の1人に、
のちに総理大臣になる
橋本龍太郎氏がいたという。

こうして中学生の安部氏は、
戦後の渋谷で、
喧嘩に明け暮れ暴れまわった。

そんなある時、
当時の渋谷で安藤組という
愚連隊を組織していた
安藤昇という男と出会い、
彼はこう言われたそうだ。

坊や、
そんなつまらない喧嘩をして
いても、
つまらないだろう。

それだったら
いっそのこと、
男を売る稼業を
やってみないか？

この時もし、
「俺の子分にならないか？」
とか、
「ヤクザにならないか」
とスカウトされていたら、
誘いを断ったそうだが。

しかし
この「男を売る稼業」
という不思議な言葉に
彼は惹かれ、
安部氏は安藤組に
出入りするようになり、
せっかく入学した
一流校はクビになる。

それから数十年後、
私たちも
「喧嘩」という暴力に
価値を見い出して、
渋谷はじめ東京において、
十五くらいから
暴れたわけだ。

ちなみに
この安藤昇という人物は、
戦時中、
特攻隊に志願するも、
訓練中に終戦を迎えた。

十九で特攻隊に
志願した時、
俺の人生は
終わったと覚悟した。
終戦を迎えて
後の人生は
余録だと思った。

橋本左内、

大石主税、

平敦盛、

さらには
私のような愚か者、

そして
尾崎豊の『15の夜』、
15の夜
尾崎 豊
b/w 傷つけた人々へ
THE NIGHT
YUTAKA OZAKI

どれも「十五歳」が、
一つのキーワードなのだが、
明らかに現代のほうが
お粗末であり、

その違いは、
武士道を歩んでいるか
いないかの違いと
言えるだろう。

真の侍というものは、
心を夜叉にして、
「憎しみ」から
戦うのではなく、

「心に社を建てん」
として、
「愛の想い」から戦う、
それが武士道である。

たとえば日本とアメリカは、
先の大戦において、
パラオ諸島で激突した。

また白人たちが持ち込んだ
病気によって、
九割の人が亡くなってしまうほど
酷い植民地支配を受けていた。

しかし日本は、
パラオから利益を
吸い上げ奪うことなどせず、

「一視同仁」とは
誰も差別せず、
すべての人を平等に見て
仁（愛）をほどこすことである。

一説には、
親日国パラオは
日本への敬意を込めて、
日の丸を
モチーフに国旗を創り、
「同じだと日本に失礼」
と少し左にずらしている、
とも言われており、

そのために、
パラオの人々の苗字には、
「サノサン」
「サクライサン」
と「さん」の意味まで
理解していなかったのか、
そのまま苗字に
「サン」が入っている人もいるし、

またパラオには、
親族の名前を付ける習慣から、
祖父母の名前を
そのまま孫に付けることもあるため、
「オカウチ」、「オカダ」、「オカムラ」
という名前の人までいる。

ちなみにパラオの言葉で、「ツカレナオース」は、「ビールを飲むこと」。

一体、誰がこんな日本語、教えたのか？

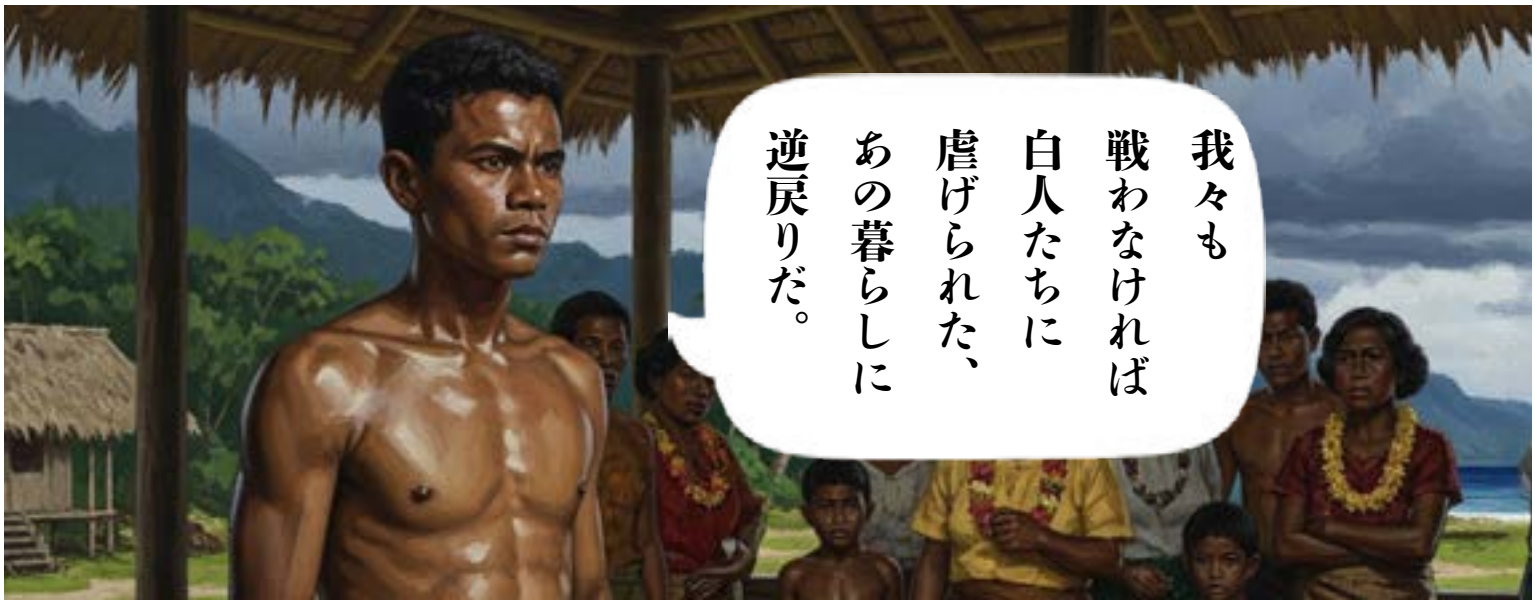
パラオのアンガウル州では日本語が公用語の一つだ。

しかしなぜパラオは、これほどまでに親日国なのか？

先の大戦中、
アメリカの太平洋艦隊が
パラオ攻略を目指していた。
米軍の兵力は、
日本軍の約４倍、
戦車は約１０倍、
重火砲は約１００倍、
航空機は約２００倍、

戦力差は歴然であるため、
まったく日本軍に
勝ち目はまったく無かった。

そこでパラオの人々は
集会を開いて全会一致で、
「大人も子どもも一緒になって
日本人と一緒にアメリカと戦う」
ということを決めた。


我々も
戦わなければ
白人たちに
虐げられた、
あの暮らしに
逆戻りだ。

パラオ・ペリリュー島の人々は、
代表数人で日本軍の
中川州男隊長のもとに向かい
「私たちも戦わせてください」
と申し出た。

しかし中川隊長は
真剣に訴えている
彼ら一人一人をじっと見つめ、
しばしの沈黙の後、

我々帝国軍人が
貴様ら土人と
一緒に戦えるかっ！

ペリリュー島の代表は
耳を疑い、
一瞬 何を言われたのか
分からなかった

なぜなら自分たち有色人種を、
まるで家畜のごとく扱う
白人たちとは異なり、
日本人は自分たちを
同じ人間として扱うばかりか、
常日頃から「仲間」と口にし、
「対等」とまで
言ってくれていたからである。

しかしそれが突然、
その同じ日本人から
「土人」などと酷いことを
言われたために
彼らは帰り道に泣いた。

このことを代表の者が
島の人々に報告すると
みんなが
「日本人に裏切られた」
「ずっと自分たちは
日本人に騙されていた」
という思いで、

悲しくて、悔しくて、
泣き続けたそうである。

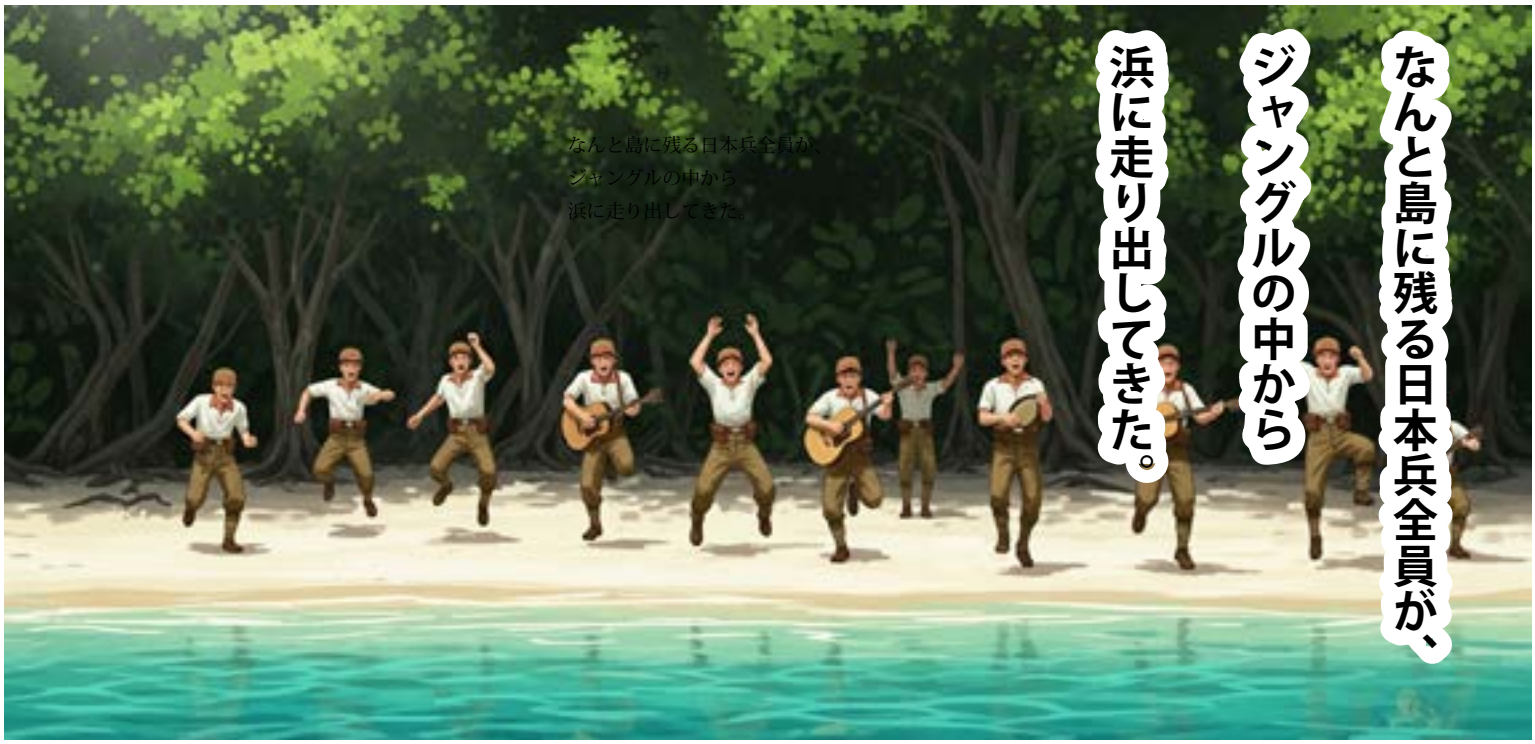
そして幾日が過ぎ、
ペリリュー島の人々は、
日本軍が用意した船で、
本島に退去する日を迎えた。

港には一人も見送りはいない。

自分たちの故郷の島を
去らねばならない以上に、
日本人に裏切られた
騙されていた」
という思いで、
島民たちは茫然自失で
船に乗り込んだ。

汽笛が鳴り、
船がゆっくりと
岸辺を離れはじめた
次の瞬間だった。

ウオォー!!


なんと島に残る日本兵全員が、
ジャングルの中から
浜に走り出してきた。
なんと島に残る日本兵全員が、
ジャングルの中から
浜に走り出してきた。

それはただ驚きだった。

そして日本人は
パラオの人々と一緒に歌った
日本の歌を歌いながら、
笑顔で手を振り見送った。

その時、船上の島民たちは
ようやく理解した。
「日本人は自分たちを
戦火に巻き込まないために
あえて『土人』という
酷い言葉を使ったのだ」と。

「そうまで言わなければ
自分たちが
『私たちも日本人と一緒に戦う』
と引き下がらなかったので、
彼らはあえて
酷いことを言ったのだ」と。

1944年9月、
ペリリュー島をめぐる
日米の戦闘の火ぶたが
切って落とされた。

島に立てこもる
日本兵は10，500人、
対する米軍は
四倍以上の48，740人、
銃弾薬を考えると
戦力差は圧倒的であり、

米軍は
「2、3日で陥落させられる。
すぐにバーベキューに
ビールでも飲めるだろう」
と予想していた。

しかし日本人はド根性を見せて、
米軍の予想を超えて、
戦闘はなんと2ヶ月半も続いた。

敵将ニミッツ提督は
自身の著書『太平洋海戦史』に、
次のように書いている。

ペリリューの複雑極まる
防備に打ち勝つには、
米国の歴史の他の
どんな上陸海戦にも見られない
最高の損害比率を
甘受しなければならなかった。
（約40%の損害、米海兵師団の第一連隊を全滅させた）

死傷者あわせて1万人を超える
犠牲者を出して、

この島を占領したことは、
今もって疑問である。

ペリリュー島の戦いにおいて、
日本人はたった34人を残して、
全員玉砕したが、
島民の死傷者はゼロである。
しかも戦った米軍部隊は、
完全に立て直し、
使い物になるのに
五年の歳月を費やした。

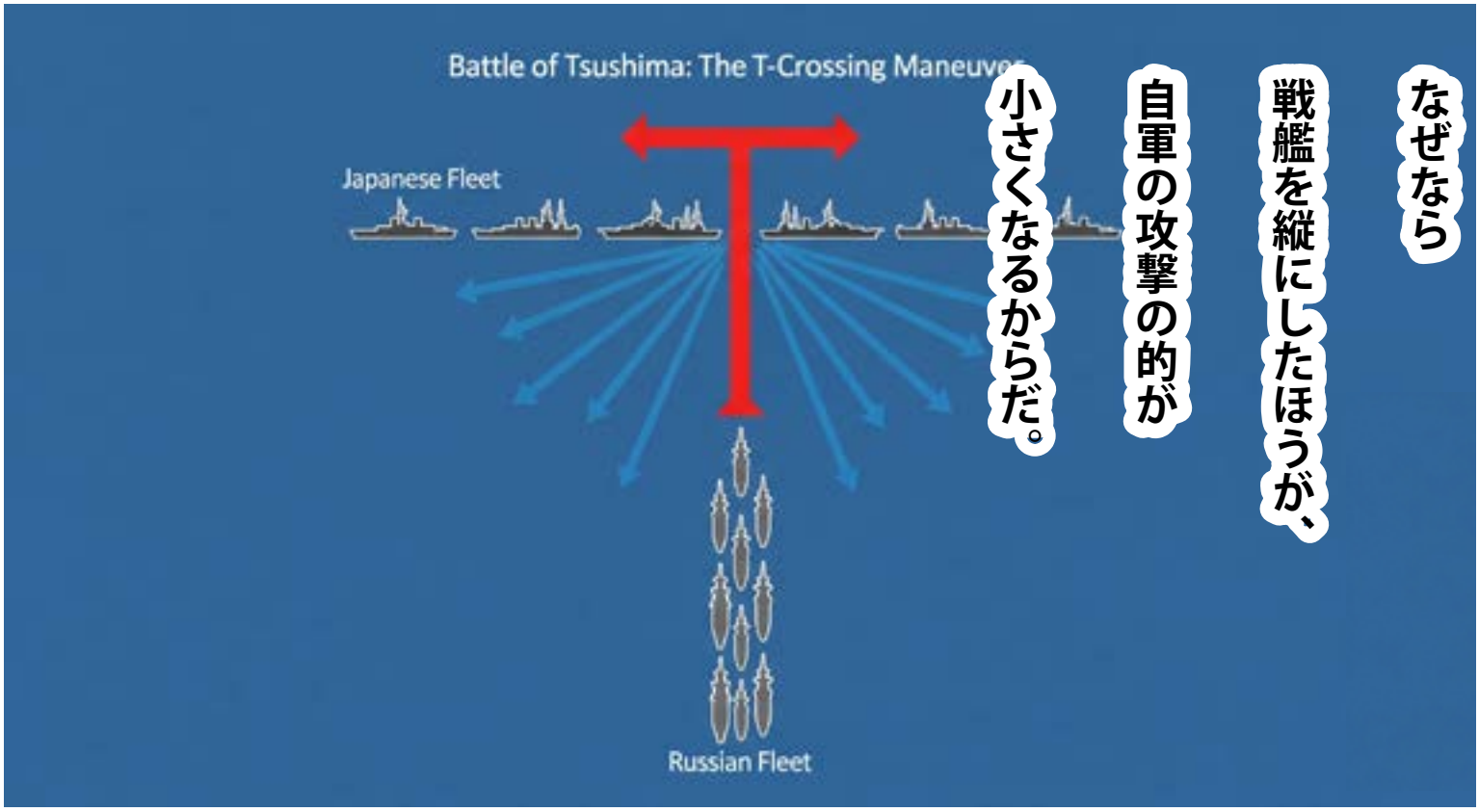
諸国から訪れる旅人たちよ
この島を守るために日本軍人が
いかに勇敢な愛国心をもって戦い
そして玉砕したかを伝えられよ
米太平洋艦隊司令長官
C・W・ニミッツ

「日露戦争」の際、
日本海海戦で戦艦「三笠」が、
「世界最強」と言われた
ロシアの「バルチック艦隊」
と戦った。

その時、東郷平八郎元帥が
取った戦法が
「T字戦法」だった。

通常の海戦のでは
「敵艦に対して
戦艦を縦にして撃つ」
というのが基本である。

なぜなら
戦艦を縦にしたほうが、
自軍の攻撃の的が
小さくなるからだ。



しかし日本の艦隊は、
旋回して横向きになり、
「世界最強」と言われる
バルチック艦隊に
横腹を見せて、
相手との位置関係を
「T字」の形にした。

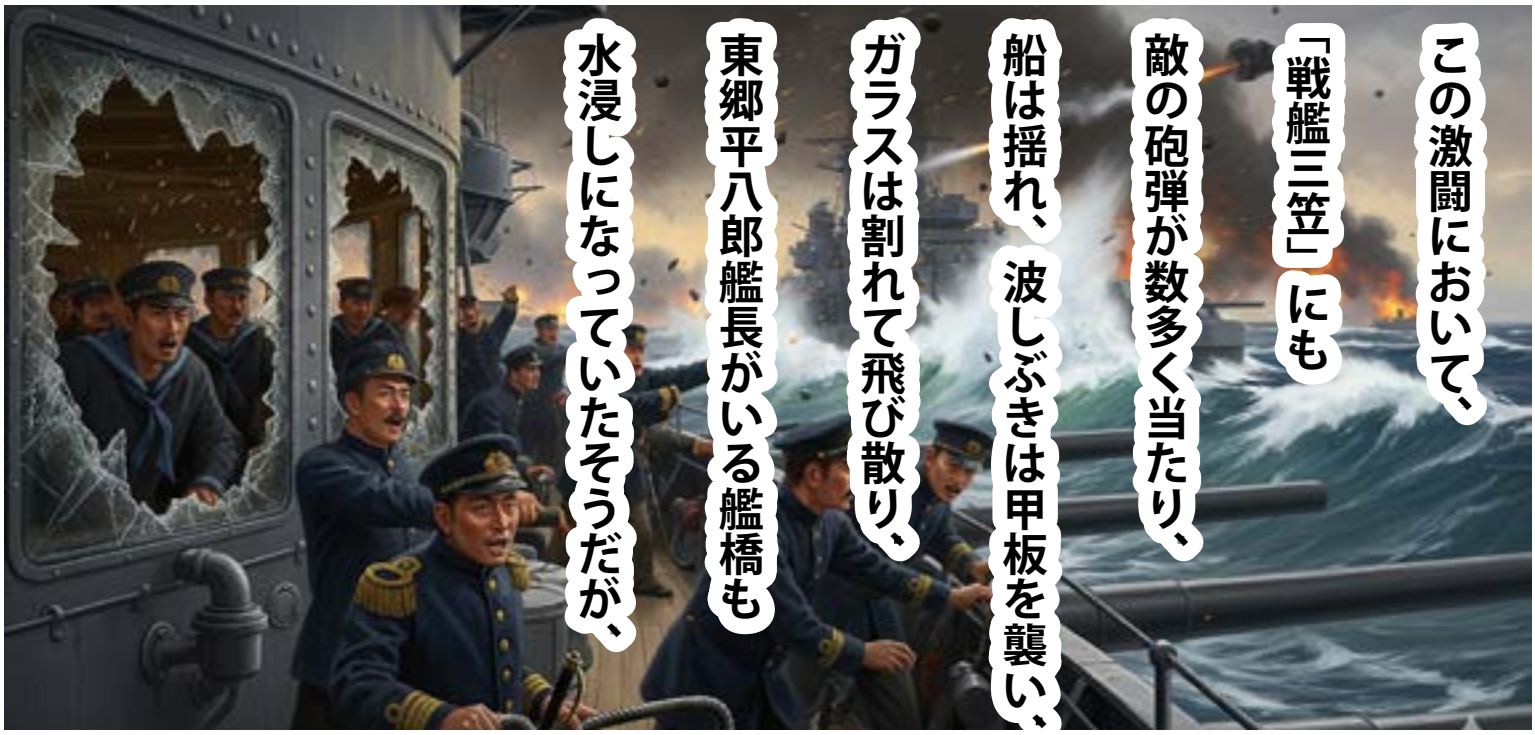
もちろんこの作戦には、
かなりの危険が伴う。
だが前も、後ろも、
側面の砲門も、
すべて使えて、
攻撃力は上がる。

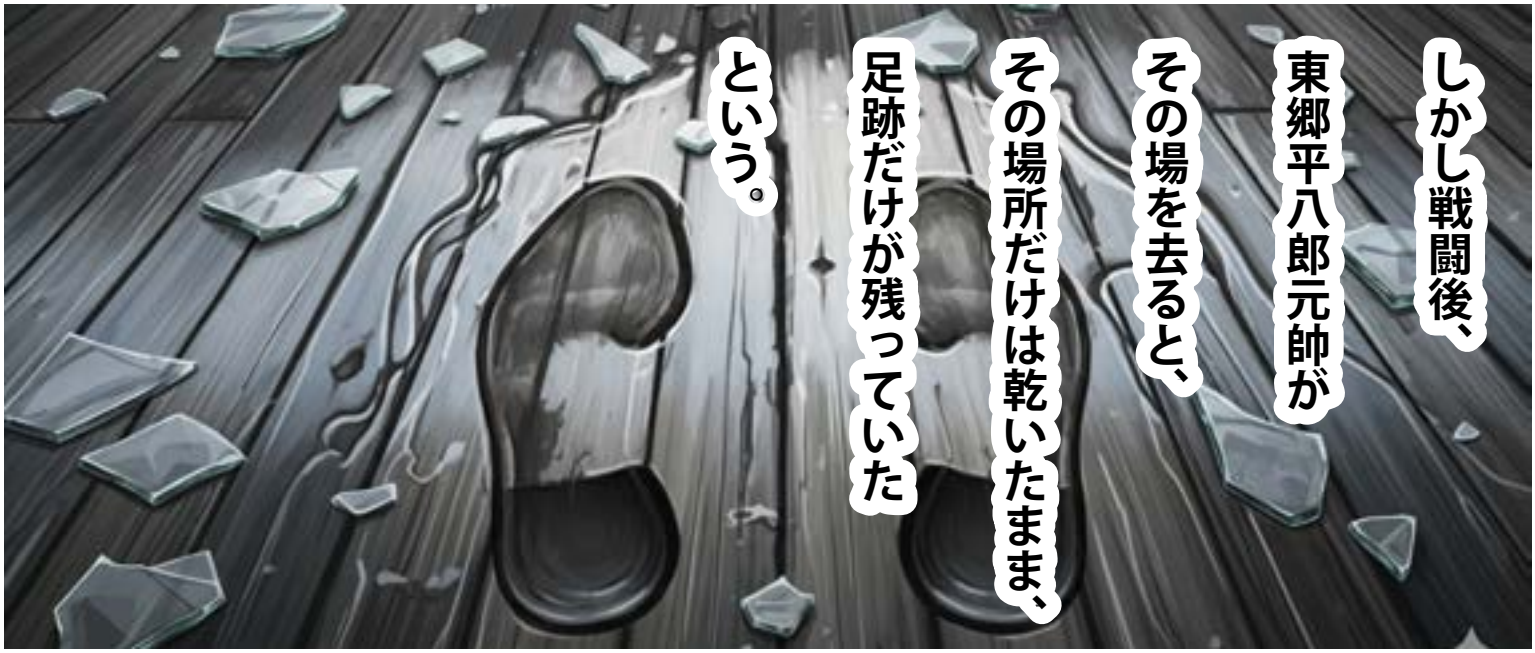
この危険の伴う作戦の中で、
東郷元帥は
自ら戦艦の甲板に立ち、
微動だにすることなく、
「撃て！」
と怒号を発し続けた。

元帥自ら先頭に立って戦う、
これは兵士の士気は上がる。

戦において士気というものは、
とても大切であり、
士気が高ければ
兵は2倍、3倍以上の働きをし、
士気が低ければ
兵は半分の働きも出来ない。

東郷平八郎元帥が主張された
「T字戦法」は大成功して、
バルチック艦隊をほぼ全滅させ、
日本海海戦に勝利した。


この激闘において、
「戦艦三笠」にも
敵の砲弾が数多く当たり、
船は揺れ、波しぶきは甲板を襲い、
ガラスは割れて飛び散り、
東郷平八郎艦長がいる艦橋も
水浸しになっていたそうだが、


しかし戦闘後、
東郷平八郎元帥が
その場を去ると、
その場所だけは乾いたまま、
足跡だけが残っていた
という。

この東郷平八郎を、
ニミッツ元帥は、
尊敬を超えて崇拝し、
自らを「弟子」とまで語り、
パラオで日本軍と
戦ったわけである。

そして彼は、
いかに日本人が、
日本とパラオを守るために、
勇敢に戦い、玉砕したかを、
ペリリュー島を訪れる人々に、
祖国に帰ったら伝えて欲しい、
そう記しているわけである。

日本人とアメリカ人、
黄色人種と白人という
多少の違いはあれども、
認め合うものがあったのだろう。
なぜなら武士道も、
騎士道も、
愛ゆえに戦うものだから。

その証拠に、
パラオのペリリュー島の
中川州男中将の墓には、
こう刻まれている。

少しでもパラオで
時間を稼ぎ、
米軍を足止めできれば、
それだけ日本本土では
「疎開」といって、
攻撃対象となる都会の人々が、
地方に逃げられる。

それは「硫黄島の戦い」も、
まったく同様で、
侍たちが壮絶な戦いを
繰り広げてくれたおかげで、
多くの人が疎開できた。

弾、水、食糧も乏しく、
灼熱とガスの噴き出す
地獄の環境の中で、
日本人のために、
日本の未来のために、
戦い続けた日本人がいたのだ。

日本側は一日でも、
半日でも、一秒でも、
米軍に本土攻撃を
行わせないために、
「モグラ作戦」を行った。
島中に地下トンネルを掘って、

洞窟や山を結んで
地下に要塞を作り、
あえて米軍を
硫黄島に上陸させてから、
応戦する戦法のことである。

この硫黄島の戦いの指揮を取った
栗林忠道中将も、
パラオで散った中川州男大佐と同じく、
自分たちが生きて
二度と家には帰れないことは
十分に分かっていた。

「硫黄島」という
名前からも分かるように、
この島の地中には
硫黄ガスが充満していた。

地下トンネルや洞窟に
何時間も居続けることは、
硫黄ガスの充満する暗いサウナに
いるようなもので、
まさに地獄だった。

しかもこの島には
川どころか池さえなく、
井戸を掘っても
塩分と硫黄の混じった
赤い水しか手に入らず、
時々、降るスコールだけが
唯一のまともな水源だった。

硫黄島を守る侍たちは
水不足を解決するために、
どうにかこの島に
貯水槽を築き、
ここから水をくみ上げて
水筒に入れた。

一周二十二キロしかなく、
歩いても回れてしまう小さな島に、
日本側の守備隊は、
わずか約二万人の侍、
それに対して米兵は、
上陸総兵力だけでも約六万人、
後方支援部隊を入れると
約十一万人にもなり、
単純に五倍以上の戦力差だった。
しかし銃、弾薬、戦車、
爆撃機などを考慮すると、
その戦力差は、
一説には3000倍にもおよび、
パラオと同等の開きだった。

しかしこの時、
栗林忠道中将は部下たちに、
死よりも厳しいことを命じた。

死に逃げてはならない。
最期の最期まで
玉砕してはならない。

「玉砕」、
それは玉が美しく砕け散るように、
侍たちが
名誉や忠義を重んじて
潔く死ぬことを意味し、

多くの日本兵が
手りゅう弾を持って
米軍に突っ込んでいった話が
残っている。

硫黄島侵攻を開始した米軍は、
三日間にわたって、
島全体への爆撃を行った。

生き残った侍の話によれば、
その爆撃は、
大地震が三日間
ずっと続くようなもので、
この世の終わりのような
体験だったそうである。

米軍は、最初から
「制空権」と「制海権」を
取った上に、
島を空爆し続けたことから、
五日後に「勝利した」と思い、
ようやく島に陸軍を投入させた。

そして6人の米兵が
適当に鉄パイプを見つけて、
それに星条旗を結んで、
彼らはその星条旗を
摺鉢山に立てた。

この時の光景は、
有名な写真として残っている。

しかも皮肉にも
その鉄パイプは、

日本の侍たちが

命のように大切にしていた
貯水槽の鉄パイプだった。

この硫黄島の戦いでは、
死傷者数では米軍が上回り、
「こんな島は五日で占領できる」
とタカをくくっていた
米軍の読みは大きくはずれ、
三十六日間も激戦が続いた。

なぜなら米軍上陸後、
地下要塞に潜んでいた
日本側の猛反撃が
始まったからだ。

米軍が行った
三日間の空爆の間にも、
日本の侍たちは、
地下要塞を掘り続け、
地上戦が開始した後にも、
地下要塞を拡張し続け、
米軍を翻弄し、攪乱した。

まさに日本男児のド根性。
自分たちはもう二度と、
生きて祖国の土は踏めない、
しかしとにかく1秒でも長く
戦いを伸ばして、
本土攻撃を遅らせて、
一人でも多くの日本人を守り、
日本を守り抜きたい、
きっとそんな想いだったのだろう。

同じような地下に

潜む激戦は、
牛島満大将によって
沖縄でも行われた。

しかも沖縄には
民間人も大勢いるため
「ひめゆり学徒」、
「白梅学徒」として
なんと女学生までもが、
兵隊の看護にあたり、
戦闘に参加した。

この沖縄戦では
2万人以上の米兵が、
PTSD、
「戦争トラウマ」になり、
兵士として
使い物にならなくなった。

海軍司令官
大田実少将は
「沖縄県民斯く戦へり。
後世特別の御高配を
賜らんことを」
そう電文して自決した。

しかし戦後の沖縄は
アメリカ統治下に置かれ、
特にベトナム戦争時は、
病んだ米兵による
レイプや殺人が多発した。
OKIANA
SOUVENIRS
DENAN

中国がマジで、
「沖縄は我々の領土、
日本に盗まれた」
と言っている今こそ、
日本人は
稚心を排して、
沖縄に想いを
寄せるべきではないか？
TOKYO

かつての日本人は、
日本人のため、
日本の未来のために
戦ったわけだが、

しかしパラオのみならず、
実はかつての日本人は、
他のアジア諸国のためにも、
身命を賭して戦ったのだ。

インドネシアの
アラムシャ元第三副首相は、
こう述べている。

我々インドネシア人は、
オランダの
（植民地支配の）鉄鎖を
断ち切って独立すべく、

３５０年間にわたり、
何度か屍の山を築き、
血の川となる
闘争を試みたが、

アメリカの政治学者
ジョージ・S・カナヘレは
『日本軍政とインドネシア独立』
という書物の中で、
次のように述べている。

日本占領軍が
インドネシア民族主義のために
行った種々の仕事のなかで、
最も重要なものの一つは、
正規軍及び准軍事組織を創設して、
それに訓練を与えたことである。

このような機会がなかったならば、
戦後のインドネシア民族革命の
経過は違ったものに
なっていたであろう。

日本の敗戦後、
再びオランダはインドネシアを
支配しようとするのだが、
現地に残っていた
日本人約1000名の兵士は、
インドネシア独立のために
オランダ軍と戦い、
そして死んでいった。

戦争は終わったのだから、
彼らには祖国に帰る
という選択もできた。

もちろん彼らにも、
妻や子、父や母、友人など、
待っている愛する人々がいる。

しかし彼らは、
インドネシアの人々が
再び酷い扱いを受けることを、
黙って見過ごすことが
できなかったわけである。

サンバス元復員軍人省長官は
日本人について、
こう述べている。
特にインドネシアが
感謝することは、
戦争が終わってから
日本軍人約１０００人
が帰国せず、

インドネシア国軍と
ともにオランダと戦い、
独立に貢献してくれた
ことである。
日本の戦死者は
国軍墓地に祀り、
功績を讃えて殊勲章を
贈っているが、
それだけですむ
ものではない。

日本に対する深い感謝の心からか、
インドネシア独立の日付は
日本の暦である「皇紀」である。
インドネシア独立宣言は、
皇紀２６０５年８月１７日
に行われた。

愛する人が
待っているいるのに、
天下国家のために
戦い、そして死ぬ、
穴澤利夫さんなどの特攻隊と
まったく同じではないか。

他国の人々を一視同仁に扱い、
白人たちによる人種差別と
戦ってくれた日本に対して、
ククリット・プラモード
タイ元首相は、
こう書いている。

日本のおかげで
アジア諸国はすべて独立した。
日本というお母さんは
難産して母体をそこなったが、
生まれた子どもは
すくすく育っている。
今日、東南アジアの諸国民が
アメリカやイギリスと
対等に話ができるのは、
いったい誰のおかげであるのか。

それは身を殺して仁を成した
日本というお母さんが
いたからである。

12月8日（開戦）は、
我々にこの重大な思想を
示してくれたお母さんが
一身を賭して、
重大決意された日である。

さらに8月15日（終戦）は、
我々の大切なお母さんが
病の床に伏した日である。

我々はこの二つの日を
忘れてはならない。

身を殺してでも仁を成す
これを儒教では、
「殺身仁成」と言う。
儒教の祖である孔子は言う、
志士仁人（ししじんじん）は、
生を求めて以（もっ）て
仁を害すること無く、
身を殺して以て
仁を成すこと有り。
意味「志士仁人は、
命を惜しがって
仁徳をそこなうことはなく、
時には命を捨ててでも、
仁徳を成し遂げるものである」

「一視同仁」、
「殺身成仁」、
この二つの精神が合わさり、
愛の想いから、
欲にまみれた者と戦う時、
人はそこに「神の強」さを見る。

実際にマレーシアの
ガザリー・シャフィー元外務大臣は、
日本人を「神の軍隊」と称した。

大東亜戦争で、
マレー半島を南下した
時の日本軍は凄かった。

私はまだ若かったが、
あの時は「神の軍隊」
がやってきたと思った。

わずか3カ月で
シンガポールを陥落させ、
我々にはとてもかなわない
と思っていたイギリスを
屈服させたのだ。

1957 年 マレーシアはイギリスから独立
「Merdeka」は「自由」や「独立」を意味

憎しみではなく、
愛の想いから戦う、
それが真の侍である。

ゆえに真の侍は、
敵を憎まず、
むしろ敵とて
思いやるものなのだ。

たとえば第二次大戦中の
１９４２年２月28日、
資源確保のため、
東南アジア進撃を
目指していた日本海軍と

それを阻むアメリカ
イギリスなどの
連合国の艦隊が、
ジャワ島北東部で遭遇。

KA-BOOM!

スラバヤ沖海戦が勃発した。

まだ当時の戦況は
日本が優位であり、
練度の高い
日本海軍を前に、

連合国の艦隊は大敗を喫した。

イギリス海軍の駆逐艦「エンカウンター」、巡洋艦「エクセター」も、日本の攻撃を受け撃沈。

乗組員は命からがら救命ボートで脱出したが、

422名のイギリス兵たちは赤道近くの海の上、炎天下で漂流していた。

それはまさに地獄だった。

船から漏れた
重油にまみれたまま
炎天下に長時間晒され、
目が見えなくなる者もいた。

漂流から
20時間以上もの
長い時間が経過し、
生存の限界に
達していた時、

遠くに
ようやく
船影が見えた。

船が
見えたぞ！

しかしその船は、
自分たちの
船を沈めた憎き敵艦、

日本海軍の駆逐艦
「雷」だった。

「雷」は乗組員
220人の小型艦だが、
開戦以来敵艦を
3隻も撃沈する
武勲を誇っていた。

機銃掃射で
皆殺しにされるだろうと
イギリス兵たちは
死を覚悟した―

殺される…

一方、「雷」でも警戒を強めていた。

左三十度、敵兵らしき浮遊物多数！

この前日、日本の病院船の救命ボートが敵によって攻撃され、

158人が犠牲となっていたのだ。

国際法を平然と違反する
連合国軍のことだ。
近くに潜水艦が潜んで
いる可能性もある。
しかも、
「雷」の乗組員は
２２０名、
イギリス兵の漂流者は
４２２名と、

日本兵の約２倍もいた。

救助後に反乱されても
防ぐ術はない。
救助には
リスクしかなかった。

しかし、
緊張が走る中、
工藤艦長は言った。

日本海軍駆逐艦「雷（いかづち）」艦長
工藤　俊作中佐

敵兵を救助せよ！
漂流者は一人も見逃すな！
この工藤艦長の言葉から、「世紀の救助劇」が始まった。

「雷」は、
「救難活動中」を
示す国際信号旗を掲げ、
船の機関を停止した。

これでは、
敵艦に見つかれば
「雷」が撃沈
されるかもしれない。

しかし、リスクを冒して、
工藤艦長は
「敵意がない」ことを示し
救助のロープを降ろした。

これに安心したのか、
イギリス兵は
救助のロープを掴んだ。

ようやく
助かる…

しかし自力で上がる
体力は残っておらず、
中には気力が尽き、
海に沈む者もいた。

ここで工藤艦長は、
日本海軍史上極めて
異例の号令を出す。

しっかりしろ！
あと少しだ！

最低限の人員を残し、

後は全員、救助に向かえ！

敵とて人間。弱っている敵を助けずして、

フェアな戦いはできない。

戦闘が継続する中での異例の救助だったが、

工藤艦長の決断に、日本海軍の乗組員も覚悟を決めた。

「雷」の乗組員たちは重油が浮かぶ海に次々と飛び込み、

力尽きた敵兵を抱きかかえ、励ましながら船に上げた。

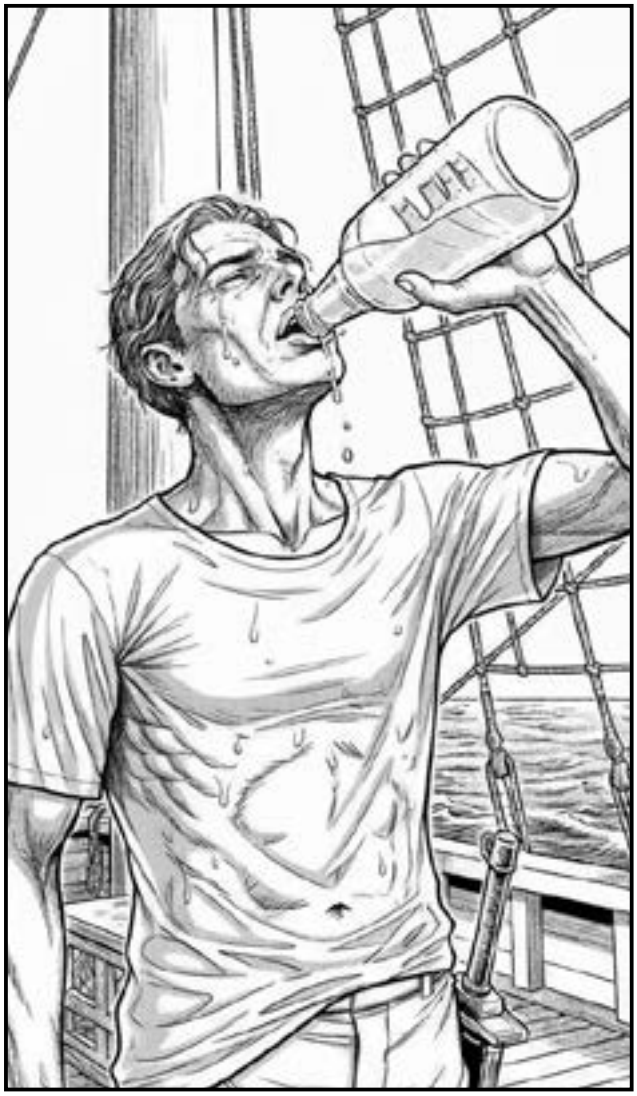
その後も工藤艦長は「漂流者は一人も見逃すな」と、

一人でも漂流者を見つけるとたとえ遠方でも船を進め救助させた。

そして、漂流していた422名のイギリス兵を

一人残らず救助したのだ。

「雷」の乗組員たちは、
重油まみれの
イギリス兵たちを
アルコールで清め、



そして
救助が落ち着いた頃、
イギリス兵の
士官21名が
甲板前方に集められた。

救助されたとはいえ、
彼らは
「捕虜」の身である。
緊張が走った。

ゆっくりと彼らの前に
歩み出た工藤艦長は

敬礼をした後、
流ちょうな英語で
スピーチした。

You have fought bravel.
（諸官は勇敢に戦われた）
Now,you are the guests of Imperial Japanese Naby.
（諸官は日本帝国海軍の名誉あるゲストである）

その言葉の通り、
イギリス兵たちは
丁重に扱われ、

ホットミルクや
ビスケット、
ビールまで与えられた。

そして翌日、
イギリス兵たちは
勾留中の病院船

「オプテンノール」
に引き渡され、
世紀の救助劇は
幕を下ろした。

この時に助けられた
イギリス海軍の
サムエル・フォール
少尉は戦後、
イギリスの外交官
として活躍された。
そして晩年の
１９９６年に、
自らの人生を
振り返って、
一冊の本にした。
本のタイトルは
『マイ・ラッキー・ライフ』
MY LUCKY LIFE
IN WAR, REVOLUTION, PEACE & DIPLOMACY
MY LUCKY LIFE · SAM FALLE
SAM FALLE
BG

1ページ目には
こう記されている。
私を救ってくれた
日本帝国海軍の
工藤俊作少佐に捧げる。

たとえばこんな話もある。

戦国乱世の名将武田信玄が、敵対関係にあった今川家と争った際、

領内に塩を持ち込むことを封鎖されてしまった。

現在の山梨県にあたる武田領の甲斐には海がないため、これは死活問題だった。

ある程度の貯えがあったものの、それも乏しくなると領民たちの生活も困窮した。
その話を聞いたのは、「甲斐の虎」「越後の龍」と呼ばれた
戦国史上最大のライバル
上杉謙信だった。
上杉謙信は、武田信玄に次の様な手紙を送った。

闘いは弓矢でするものであり、
米や塩でするものにあらず。
正面から闘う事が
できないといって、
塩を差し止めるとは
卑怯千万な行為。
武士の恥。

我は何度でも
運を天に任せて貴方と闘い、
決着をつけようと思っている。
宿敵とは全力で闘いたい故に、
必要な分だけ塩を
なんとしても送り届けましょう。

また武田信玄も後年、遺言の中で次のようなことを言っている。

謙信は義の人である。
未だかつてあの様な
勇猛な武将を私は見たことがない。
だから彼とことを構えてはならぬ。
謙信は『頼む』とさえ言えば
必ず援助してくれる。
断る様なことは決してしない男だ。

この信玄は大人気もなく
謙信に頼らなかったばかりに
一生、彼と闘うことに
なってしまったが、
甲斐の国を保つには
彼の力にすがるほかあるまい。

信濃川中嶋合戦之圖
上杉謙信も武田信玄も、決して慣れ合いをしたのではなく、
自分の〝国〟を守るため、生死をかけて戦った。
計5回にわたって行われた「川中島の合戦」は、戦国史上まれに見る死傷者を出す激戦であり、
互いに二勝二敗一引き分けと言える結果であった。

しかし侍には、「敵に塩を贈ることを誉れとする心」があった。敵ですら、一視同仁に愛していたのだ。
そして、先人の生き様を学び、自らの人生に生かす。
こうして武士道精神は、日本で受け継がれてきたのだ。

日露戦争とは？

日露戦争（1904～1905年）は、アジア侵略を目論んでいたロシアと、日本が戦ったアジア防衛戦争。日本は近代化を背景に軍事力を強化し、旅順攻囲戦や日本海海戦で勝利。ポーツマス条約で南満州の権益を獲得。日本の国際的地位向上に繋がった。

また、日本とロシアがアジアの※覇権を競って戦った「日露戦争」の有名なエピソードがある。

日露戦争の開戦当時、リンカーンによる「黒人の奴隷解放宣言」から約40年経っていたが、

「白人が優れていて有色人種は劣っている」という激しい人種差別は、まだまだ当たり前の時代だった。

RUSSIA
そのため、ロシアがアジアを侵略することは当然の権利であり、日本がロシアに歯向かったとしても、
「有色人種の日本人が世界最強の白人国家であるロシアに勝てるはずがない」と考えられていた。
JAPAN

しかし
大半の予想を裏切って、
日本軍は大国ロシアに勝利した。

日本の勝利は、
世界に衝撃を与えた。

そして
1905年1月5日、
旅順要塞で
激闘を繰り広げた
ロシアの司令官
ステッセル中将と

日本軍の侍・
乃木希典将軍とで
停戦会見が行われる
ことになった。

水師営（すいしえい）の会見だ。

この時、
世界中から
注目を集めていた
会見の様子を

「どうして映像に
収めたい」と、
あるアメリカの
映画技師が、
熱望してきた。

当時、
「戦争記録映画」が
注目され始めて
いたため、

アメリカの映画館では
短編のニュース映像や
記録映像が人気を
集めていた。

歴史的勝利の会見を
映像に収めることは、
映画会社にとっては
「ビジネスチャンス」
だったのだ。

本物の
戦争映像なら
世界中でヒットするぞ…

しかし乃木将軍は
記者の申し出を
丁重に断った。

敵将にとって
後世まで恥が残る映像を
撮らせることは
日本の武士道が許さない

AMERICAN

ところが
アメリカ以外の
他の国々の記者たちも、

「せめて写真撮影の
許可を」となかなか
引き下がらなかった。

せっかくのビッグチャンスじゃないか…

将軍、せめて1枚だけでも…

ならば会見の後、我々が友人となって同列に並んだところならば一枚だけ許可しよう。

そうして撮影されたのが次の写真だ。

乃木・ステッセル両将が肩を並べて座り、

両軍の幕僚たちもまるで友人同士のように居並んで映った。

しかも乃木将軍は、ステッセル将軍たちに帯剣まで許している。

勝者が敗者のことを思いやり、互いの栄誉を称え合ったのだ。

外国人記者たちは
この日本の武士道
精神に感動し、

水市営の会見の
電文と写真が
各国に配信され
世界中を驚かせた。

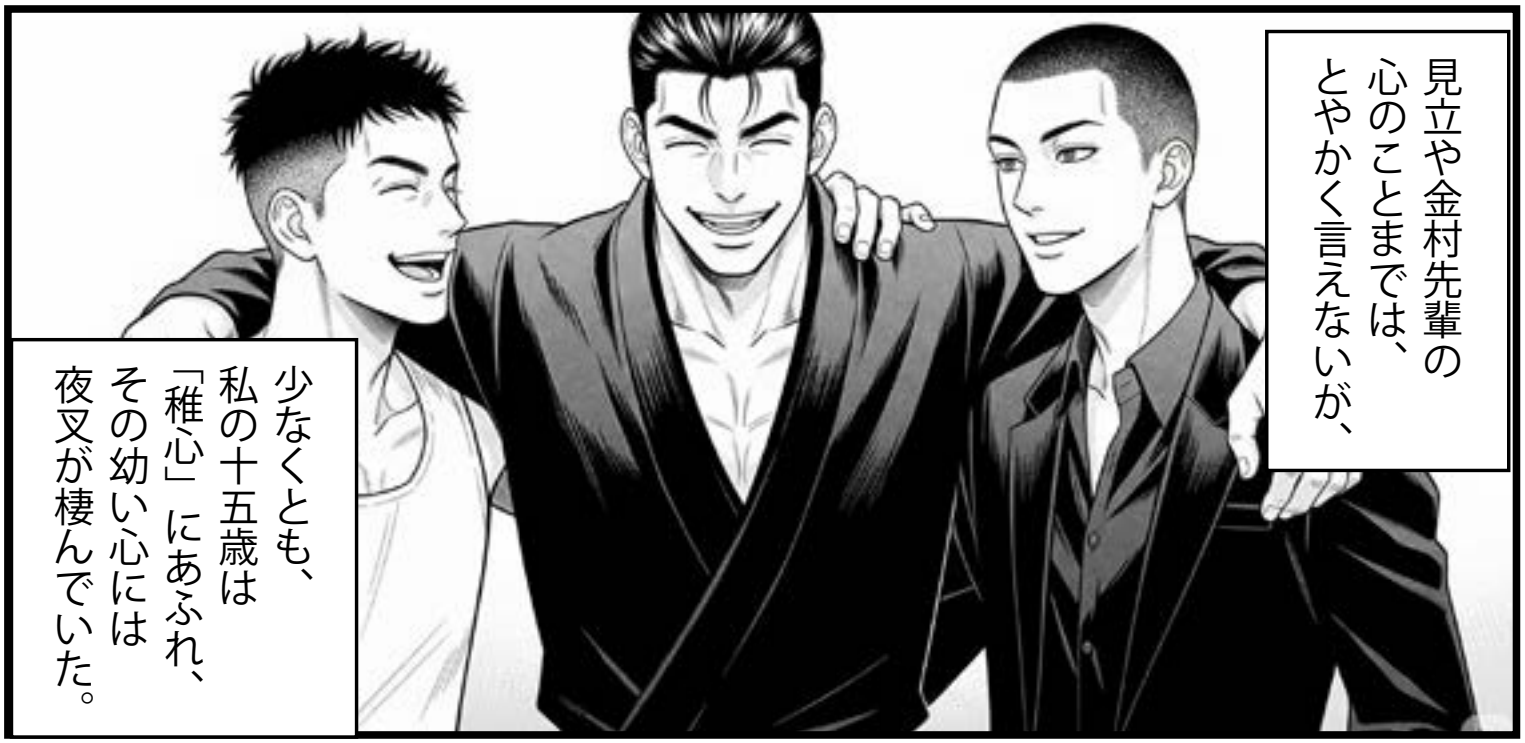
ENGLISH

人間を一視同仁に見て、
憎しみからではなく、
愛の想いから、
已むに已まれず、
殺身成仁の精神でもって戦う。
それこそ
真の武士道。

先の大戦において、
侍たちが
凄まじい戦いぶりによって、
多くのアジア諸国が
独立を果たすのみならず、
本土への攻撃を
遅らせてくれたおかげで、
数十万人の日本人が
疎開することができて、
焼け野原となった、
戦後の日本を復興させて、
私たちは今、
生かされているんだ。

国や世界に対する考え方は、
現代とは違うけれども、
すでに述べたように、
かつての日本人は、
十五歳で大人であり、
天下国家のために
命を懸けて戦った。

しかも
憎しみからではなく、
愛の想いで戦うのが、
真の侍であった。



この違いは単純で、
武士道の違いだが、
しかしなぜ武士道は、
失われてしまったのか？

戦争は悲惨だが、
しかし戦争に敗れることは
さらに悲惨である。
なぜなら歴史は
勝者が都合の良く
書き変えるために、
敗戦国の国民は、
偽の歴史教育によって、
真実からは
遠ざけられるからだ。

GHQ 占領軍の指導のもと、
子どもたち自身の手で教科書が黒塗りにさせられた。

「エピソード2」の中で、
「学校とは真実と共に
嘘を教えるところである」
ということを述べたが、
歴史教育に関して言えば、
現在の日本の歴史の授業は、
もはや狂っていると言える。

なぜ日本は、日本に日本まれず
アメリカと戦争を行ったのか、
その時代背景を教えないのだから。

皮肉なことだが、
可哀そうなのは、
偽の歴史に、
深く騙されているのは、
実は学校の授業を、
よく勉強した人たち
なのだ。

だから私が、
歴史の授業をさせて頂く。

ヨーロッパは
乾燥地帯が多いため、
種を蒔いても収穫量が少なく、
パンを作って食べて
生きていくことが
とても大変だった。

だから欧米人は
「狩猟社会」を築き上げた。

それはキリスト教が
「動物には魂はない」
と考えることも理由の一つだろう。

しかもその「狩猟社会」は、
海賊、
いわゆる「バイキング」を
生み出した。

しかもイギリス政府は、
海賊船に対して
「私掠船」の
承認を与える代わり、
略奪品の5分の1を
税として国に納める
義務を課した。

つまり「海賊税」を払えば、
「略奪行為は国家の了承済み」
ということになったのだ。
バイキングは、
略奪と殺戮を行う
とても恐ろしい存在だった。

そして航海技術が発達し、
「大航海時代」を迎えると、
白人たちの
「動物には魂が無い」
という考え方は、
我々有色人種にも向けられた。

コロンブスが
アメリカ大陸に到達すると、
白人たちは、

そこに住んでいた原住民を
「インディアン」と呼んで殺戮し、
偏狭な土地へと追いやり、
アメリカ大陸を支配した。

白人たちの暴力と、
彼らが持ち込んだ病気によって、
多くの人々が死んでしまったため、
彼らは「働き手」の確保に困った。

そこで彼らは、
「暗黒の土地」と呼んでいた
アフリカから、

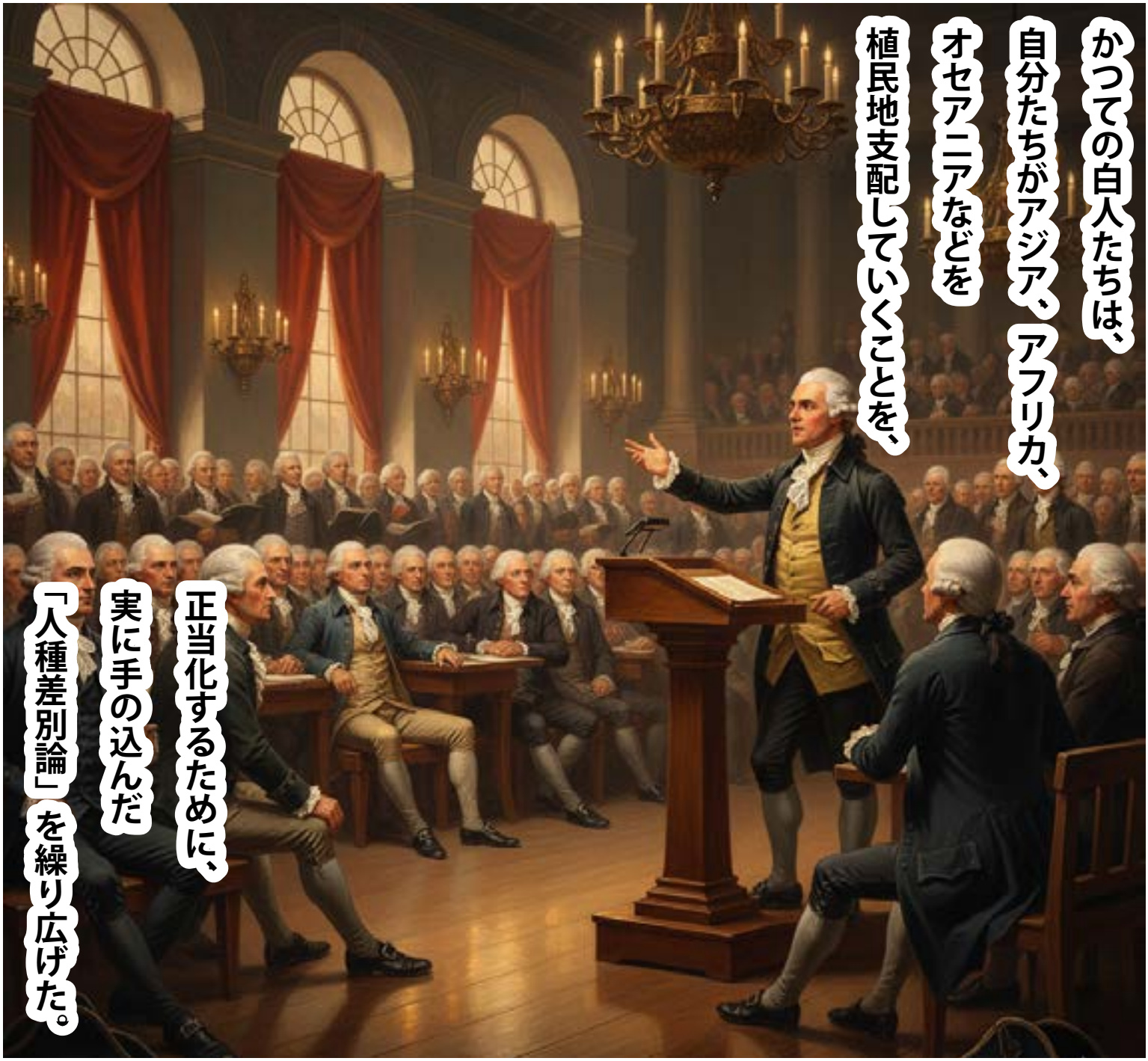
体の丈夫な黒人たちを連れ去り、
家畜のように売り買いして、
奴隷として働かせた。
航海中に病気になれば、
他の者に感染するため、
容赦なく海に捨てられた。

16世紀から19世紀まで
約五百年の間に、
約1300万の黒人が売買され、
男性と女性、子どものうち
約200万人が
アメリカ大陸に向かう途中で
死亡して海に捨てられた。

実際の奴隷船内はもっと悲惨であった

買われた奴隷は焼き印を押され、
生涯、主人の言いなりであり、
そんな「暗黒の時代」が
約五百年も続いたと言われている。

オーストラリアや
ニュージーランドも、
イギリスによって支配され、
タスマニア島に住んでいた
原住民のアボリジニは、
ハンティングという遊び感覚で
全滅させられてしまった。


かつての白人たちは、
自分たちがアジア、アフリカ、
オセアニアなどを
植民地支配していくことを、
正当化するために、
実に手の込んだ
「人種差別論」を繰り広げた。

我々白人は
世界を支配すべき人種なのだ。
だから世界の文化文明を担うべく、
神に託された人種としての使命があ

我々はその使命を放棄しない。
神は我々を選んだのだ。
我々は野蛮でもうろくした
人々（有色人種）を治めるために、
政治の達人として創られたのである。

こうした主張は
「マニフェスト・ディスティニー
（明白なる運命）」と言われ、
広く白人たちに、
受け入れられた。

ペリー提督は、
日本にやってくる前、
日記にこう記している。

特異で半ば野蛮な一国民を、
文明諸国民の家族の中に
組み入れようという、
我々の当面の試みが、

流血の惨事なしに
成功できるようにと、
神に祈るものである。

『ペリー日本遠征日記』

西洋は野蛮だ

幕末の英雄 西郷隆盛は、
ある時、こう言った。

するとその話を聞いて、
別の者はこう言った。
『いや、西洋は文明ですぞ！』

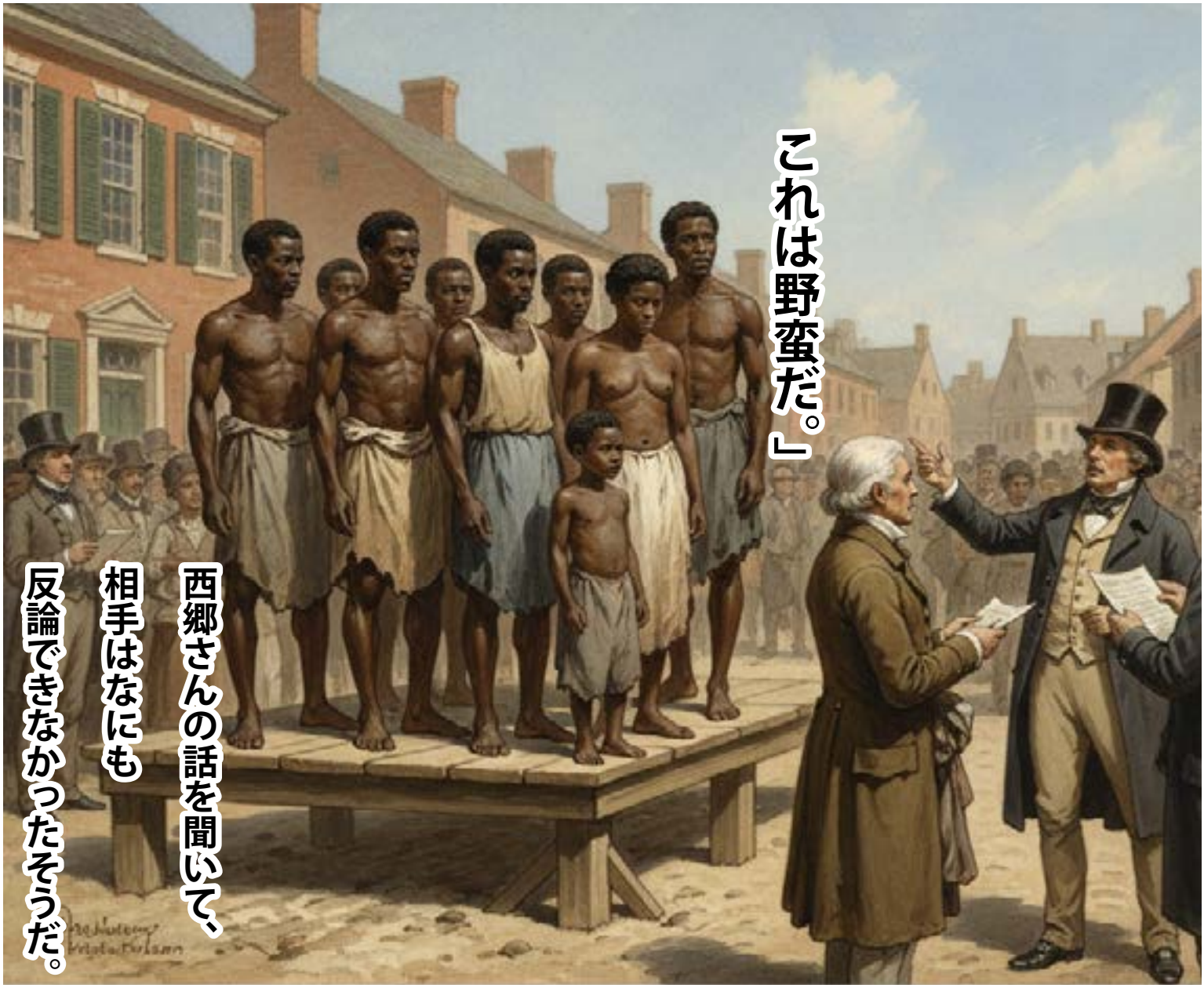
さらに
西郷は畳かける。
『いや、いや、野蛮だ』

「なぜそこまで申されるのか」

「本当に西洋が文明であれば、
慈愛の心をもって
文明未開の国々を、
文化開明に導いてやるのが
本来あるべきところの姿だろう。

しかし西洋は、
相手の国が
未開であればあるほど、
むごい仕打ちをし、

相手の知識も低く、
道理も十分にわかっていない
国であるほど残忍な事をする。
そして自分たちは利益を得ている。



ちなみに
世界でも有名な
大英博物館だが、
実は展示品の多くが
盗品である。

植民地時代などに、
様々な国家の国宝を、
勝手に、横暴に、
強引に奪い盗ったのだ。

そのために、
多くの国々が
国宝の変換を要求している。

そのために
イギリスに対して、
日本のネットでついたあだ名は、
「ブリカス」である。

日本の歴史には、
欧米のような
奴隷社会など
存在しなかった。

たとえば1862年、
リンカーン大統領によって、
「奴隷解放宣言」が、
発令された十年後、

「マリア・ルス号事件」
が発生した。

横浜港に停泊していた
ペルー船籍「マリア・ルス号」
から、清国人（中国人）が、
逃亡したことから、
この船が奴隷運搬船で、

船内には、
鎖に繋がれたり、
拷問を受けたり、
食糧不足など、
凄惨な状態に置かれた
清国人２３０人が発見された。

当時の外務卿（外務大臣）
副島種臣は、
神奈川県権令（県副知事）
大江卓に清国人を
奴隷船から救助すること命じた。

「マリア・ルス号」の船長は
訴追され、
裁判により、
清国人は解放され、

無事に祖国へと
帰国することができた。

かつての日本では、
国民一人一人が
「人間としてあるべき姿」
を考えてるのみならず、

「国家としてのあるべき姿」
をも深く考えていたために、
日本政府として、
他国の人々が、
奴隷扱いされることさえ、
許さなかったのだ。

しかしそもそも、
なぜ日本はアメリカと、
戦争したのだろうか？

先の大戦に日本が敗れて、
戦勝国が一方的に敗戦国を裁く、
という正義の欠片もない、
『東京裁判』が行われ時、

この言葉を裏付けるように、
日本の降伏調印式の時、
米国軍艦ミズーリ号には、
黒船来航時のペリー艦隊に
掲げられていた「星条旗」が、
わざわざアメリカ本国の
博物館から持ち込まれた。

また、降伏調印式の翌日、
『ワシントンポスト』は
「ペリー以来の目的を達成」
と報じた。

彼らの目的とは何？

これでどうして、
先の大戦を
「日本の侵略戦争で、
正義のアメリカが、
日本に鉄槌を与えた」
と言えるのだろうか。

日本人はいい加減、
知らなければいけない、
本当に野蛮な行為を行ったのは、
一体、誰であったのかを。

日本はヨーロッパに比べて
肥沃な大地があり、
しかも四季もあるために、

種を蒔いて努力すれば
豊かな実りを得られる。

また、日本の民族宗教の神道では
「天照大神も稲作をされていた」
と伝わっているため、

古くから日本人は、
誰かから搾取するよりも、
勤勉に働くことを
「美徳」としてきた。

さらにインドから伝わった仏教は、
「動物にも魂や霊がある」
と考えることから、

日本では牛などの家畜も
家族のように大切に扱ってきた。

675年の「肉食禁止令」から、
1872年の「肉食解禁令」までの
千二百年間、肉食は原則、禁止だった。

たしかに日本にも
激しい戦国の世はあったが、
しかしそれでも
日本人は、

お米を大切にすると共に、
世界の中でも
比較的に温和な
「農耕社会」を築き上げたのだ。

そして白人たちによる、
酷い人種差別が行われる中で唯一、
白人たち欧米諸国と
肩を並べると共に、

なおかつその「強さ」を、
弱い者イジメに使うことなく、

日本人のためにも、

外国の方々のためにも、
「一視同仁」に戦い、

「殺身成仁」、
身を殺して仁を成したのは、
この地球上で唯一、
実は武士道の国、
日本だけである。

日本人が強すぎたから、
日本を武装解除すると共に、
日本人を弱体化させる
ことを目的に、
精神的武装解除、
武士道は破壊された。

日本人をエコノミックアニマルへと、
変貌を遂げさせるために・・・。
では、なぜ武士道を解体して、
わざわざ日本人を
弱らせる必要があったのか？

勝者が作った歴史では、
日本こそ侵略国であり、
日本人は酷い民族である、
といった歴史を学ぶが、
真実はそうではない。

今も某国の工作員は多く、
日本人が真実を知って、
日本人としての誇りを
取り戻さないように、

ネット上にも、
「日本は悪い国だった」
というプロパガンダがあるが、
騙されてはいけない。

日本が悪い侵略国では
なかったのならば、
むしろ誰かが
日本に戦争を仕掛けて、
侵略していることになる。

しかも武士道が解体され、
侍精神を失った日本人には、
その事実に、
まったく分からず、

気づかないように、
狡猾にいつまでも日本を
統治し続けなければならない。

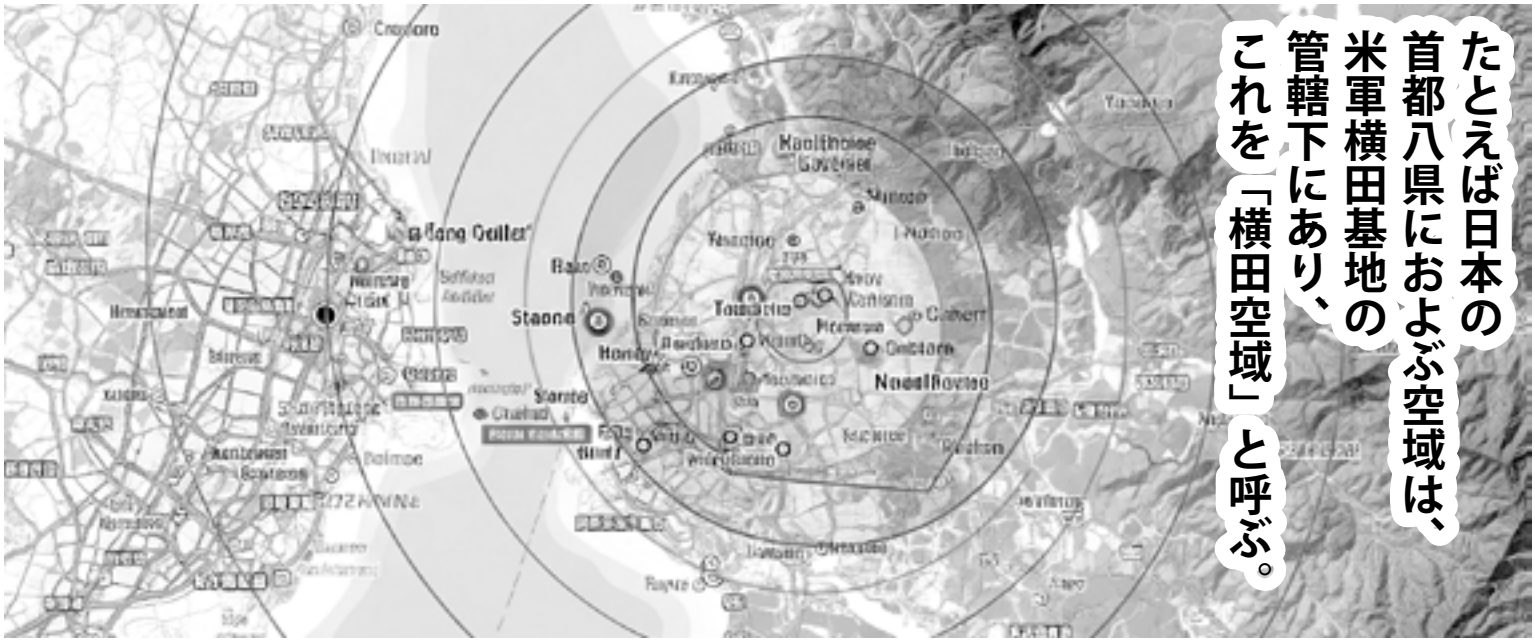
つまり、
今の日本という国が一体、
どういう状態で、

さらに杉並区が
実はどんな町なのに、
私たちは「喧嘩」なんて
くだらないものに
明け暮れていたのか。

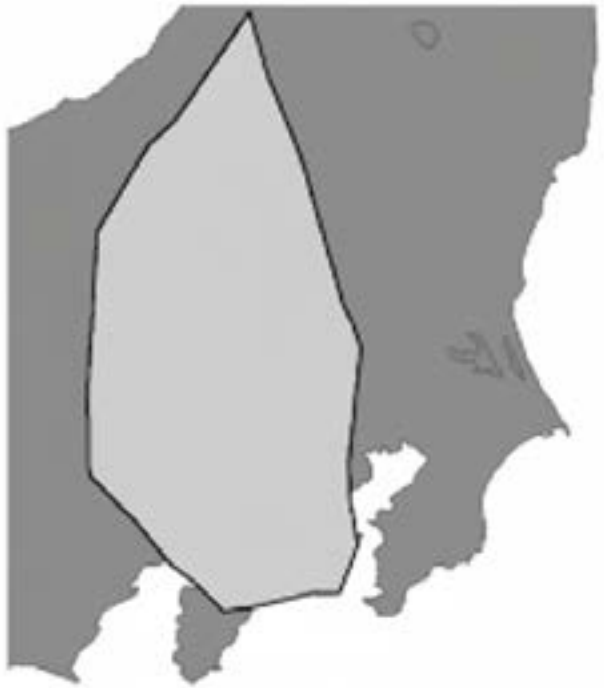
すでに述べたように、
実は日本は先の戦争に
敗れて以来、
金融的には植民地であり、
そして多くの日本人が
殺されてきた。

「日本の支配権」は実質、
日本人の手にはない。

日本から最大の
利益を得ているのは、
アメリカ国民ではなく、
アメリカ国民をも
餌食にしている、
強欲な者たちである。

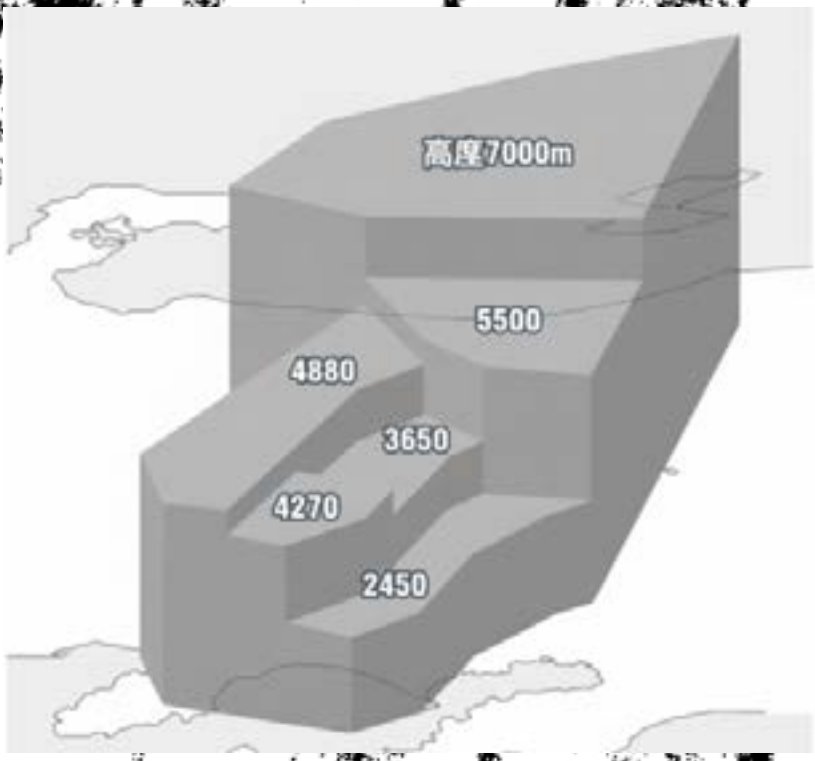


たとえば日本の
首都八県におよぶ空域は、
米軍横田基地の
管轄下にあり、
これを「横田空域」と呼ぶ。



そのために
東京の羽田から
大阪の伊丹までは、
本当ならば
約30分で着くのに、
しかし東に一度、
迂回しなければならず、
そのために
約一時間もかかっている。

この「横田空域」は
かなり広大で、
日本の首都を含んだ
日本の領空で
あるはずなのに、
日本の旅客機は、
米軍の許可がなければ
通過できない。



福岡などの九州方面に
行く飛行機は、
かなり高度を上げて、
この空域を回避
しなければならない。

また日本には、
在日米軍の基地や施設が
130個もあるが、
しかし自衛隊基地は
アメリカには一つもない。

さらに日本の地上も
潜在的には、
完全に米軍に支配下
にある。

たとえば
沖縄国際大学に
ヘリが墜落した際、
米兵によって
誰一人として
日本人は、
その日本の領土に
近づくことが
許されなかった。

KEEP OUT
KEEP OUT
KEEP OUT

なぜなら米軍ヘリには、
多くのアメリカの
知的財産があるからだ。
首都圏の巨大な空域が、
他国によって完全に
制圧管理されていて、
領土内には130にもおよぶ
他国の軍事基地があり、

その他国の権限によって、
すべて領土を、
いつでも封鎖できる国家は、
はっきり言って、
「独立国家」ではない。
古霊

では、実は日本が植民地であったとして、その弊害は、私たちの暮らしに、どんな影響をおよぼすのだろうか？
トランプ大統領は二期目を迎えると、日本に対して、「アメリカに車を売りたいなら、アメリカ国内に工場を作れ！

雇用を生み出せ！でないと関税は25％だ！」と主張してきた。しかしそれは日本国内における雇用が、大幅に減ることを意味する。

なめられてたまるか！
石破元総理は、そうイキがってみせて、関税を15％に引き下げることで、2025年17日24日に「日米合意」が成された。

日本のマスコミは、
これを「交渉は大成功！」
大合唱した。

しかし結局、日本は
５５００億ドル（８０兆円）
もの大金を米国に投資し、

もしも利益が出たら、
その内の９０％は
アメリカに差出し、
日本にはわずか１０％だけが
還元されることになった。

いい加減、気づこう！

これは日本の総人口人で
割ったても、
赤ん坊から老人まで、
一人あたり６４千円である。

そう、実は日本および日本人は
キャッシュディスペンサーなのだ。

たとえば2008年9月、
リーマン・ショックによる不況が
まだ跡を引いていた当時、
中川昭一財務大臣は、
次のように述べて、
ホワイトハウス向けて猛抗議した。

このやり取りを
日本人で見ていたのは、
『産経新聞』の特別記者の
田村秀男ただ一人であった。

それは結局、
「日本人は皆ATM」
ということを意味する。

猛抗議の翌年
2009年3月3日、
中川財務大臣は
酩酊会見を行って、
大臣を辞任する。

なぜ一緒に会見を行った
白川方明日本銀行総裁は、
記者会見を止めなかったのか？

ちなみに彼はその後、
国際金融エリートが経営する
この「地球」という惑星の
金融最大の牙城であり、

現代の「バベルの塔」である
『国際決済銀行BIS』の
副議長へと出世を遂げている。

一方、
酩酊会見からわずか七カ月後
中川元財務大臣は
自宅で謎の死を遂げた。

では、我々日本人は、
どのようなカタチで
ATMとなって、
世界にお金を
ばらまいているのか？

たとえば我々日本人が
見せられている国家予算は、
「一般会計」というもので、
これは１００兆円程度だ。

国民から集められる
約５０兆円の税収では、
足りないから
赤字国債（借金）を発行して、
さらに約５０兆円を準備して、

しかし実は
その「一般会計」の奥に、
400兆円にもなる
「特別会計」がある。

「一般会計」と「特別会計」は、
複雑に重複しているため、
実際の日本の国家予算は、
約270兆円ほどである。

しかしこの「特別会計」は、
財務省のホームページに
記載されているものの、
国会できちんと
議論されたことはない。

2001年に民主党の
石井紘基議員が、
宮澤喜一財務大臣に、
こう質問した。

特別会計が
いくらくらいあるか
知っているか？

情けないことに
宮沢財務大臣は、
「特別会計」を
把握していなかった。

一度、
お調べまして・・・

石井議員が殺害されたのは、
2002年10月25日の
ことだが、
彼は死の直前、
周囲の人たちに
「近々、
日本がひっくり返るほど
重大なことを発表する」
と語っていたという。

彼の家族の話によれば、
事件の6日前には
石井は「車に追われている」
と口にして、
知人のところへ駆け込んだ。

事件の2日前には
まるでリンチにでも
あった様子で帰宅している。

また刺された事件当日も、
救急車が到着する前に、
すでにパトカーが
何台も来ていたために、
狭い路上を救急車が入れず、
迅速に救急処置が
出来なかった。

刺された石井議員が
病院へ運ばれる際も、
なぜか彼の妻さえ、
救急車に乗ることが
認められなかった。

この世で命を
引き取る瞬間さえ、
立ち会わせて
もらえなかったのだ。

しかも興味深いこととして、
石井議員の手帳と彼の鞄の
中の資料は、
警察が押収した事件の
証拠品から消えていた。

2016年の『報道ステーション』、降板が決まった古舘伊知郎の最後のゲストは、みのもんだった。

なにこれ！

我々一般国民が、まったく知らないところで二百数十兆円というお金が、自在に各省庁のお役人が、使ってたと思ったら、許せない！

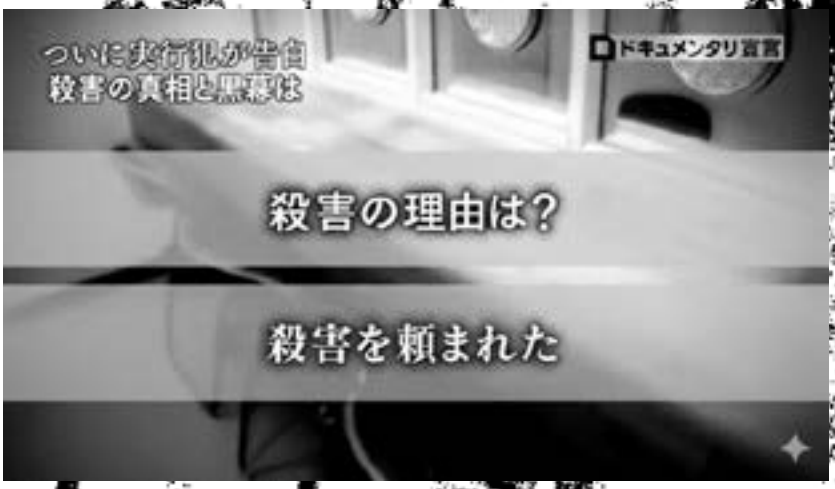
こんなバカな国だったのか、申し訳ないけれども、公認会計士と言われる人十人を国会に送り込んで、特別会計を調査したい、

その後、みのもんたは、古館伊知郎と共に、テレビから姿を消した。

国会でも、テレビでも、取り上げられない日本の税金、特別会計二百数十兆円。

石井議員を殺したのは、
指定暴力団系の右翼団体の
通名「伊藤白水」、
本名は「尹白水」という
在日朝鮮人である。

「刑務所送りとなった尹は、
２０１０年 10月に
放送された
テレビ朝日の報道番組
『ドキュメンタリー宣言
石井紘基議員殺害事件の真相』
の中で明確に、



「最初に３０００万円
次に１５００万円もらって
殺害を頼まれた」と答えた。

つまり尹白水は
確実にヒットマン（殺し屋）
だったわけだ。

問題なのは、
「尹を雇って金を払って
雇ったのは誰なのか？」
ということである。

米国のジャーナリストの
デヴィッド・カプランと
アレック・デュブロは
1986年に
日本のヤクザと
右翼をテーマにした
『Yakuza』
という本を出版した。

その書籍の中で彼は、
次のような衝撃的事
実を述べている。

戦後、GHQ占領軍は、
地主制度、財閥、軍部と共に、
ヤクザも解体すべきであった。

しかしGHQ占領軍は
それをせずに、
ヤクザの社会的な存在を
容認すると共に、

さらにヤクザが不法に
勢力を拡大しようとする
その動きを黙認したり
助長したりもしてきた。

つまり戦後のヤクザは
アメリカによって生まれた。
これが本書を書く動機であった。
これを証明する証拠や資料は、
米国立公文書館の機密解除文書
から得た。

しかしなぜアメリカは
地主制度、財閥、軍部は
解体したというのに、
ヤクザは解体
しなかったのか？

それはおそらく、
植民地日本の中で、
中川財務大臣や
石井議員のような
生意気な政治家、
ジャーナリストなどが
現れたら、
ヒットマンを
飛ばすためだろう。

多くの日本人にとって
「右翼」というものは
「愛国者」と認識されている。

そのために、
「なぜ在日朝鮮人の
暴力団員である尹白水が
右翼構成員を
標榜するのか」と
疑問に思われる
かもしれない。

1960年代、
警視庁と各県警本部は、
「東京オリンピック」に向けて、
「治安改善」を目的に
「暴力団壊滅作戦」を行った。

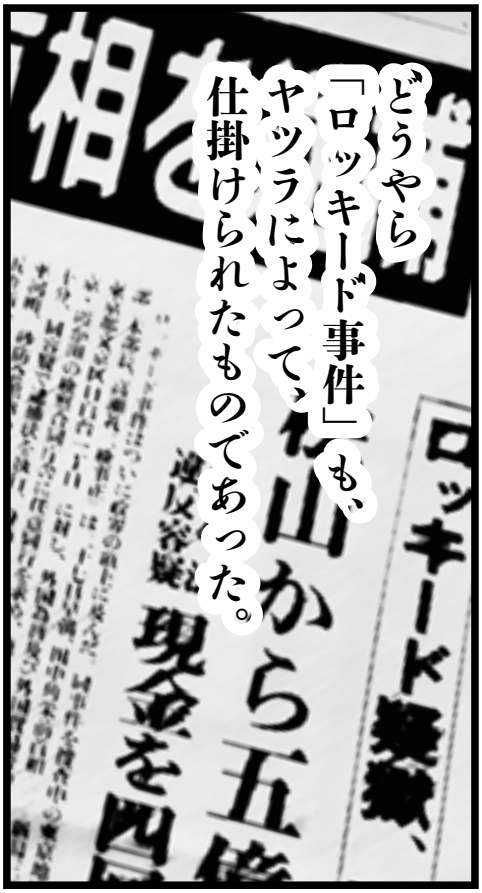
すると当時の右翼の大物で、
なおかつCIAエージェント
であった
児玉誉士夫の手引きのもと、
暴力団の一部は、
右翼団体を標榜し始めた。

自民党の岸信介、
『日本テレビ』
初代オーナー
正力松太郎、
右翼の大物の児玉誉士夫、
彼らが、
CIAのエージェントで
あったことは消せない
歴史的事実である。

オレは
CIAのエージェントだ

この人物は、
そう自慢していたし、
また公開された
CIAの文書では、
「嘘つき」、「ギャング」、
「ペテン師」、「泥棒」と
こっぴどく
コキおろされている。

「ロッキード事件」とは、
航空機製造会社『ロッキード社』が、
自社の製品の販売を目的に、
日本の政界や財界に対して、
多額の賄賂を贈ったとされる
汚職事件のことであり、


どうやら
「ロッキード事件」も、
ヤツラによって、
仕掛けられたものであった。
ロッキード疑獄、
違反容疑
現金を

この事件によって田中角栄は、
日本の政界の表舞台から
徐々に姿を消していった。

韓国系ジャーナリストジュリー・ムーン（文明子氏）は、アメリカの政治家、政治学者でもあるヘンリー・キッシンジャーに、

ロッキード事件は貴方が仕掛けたんじゃないの？

するとキッシンジャーは

of course（もちろん）

さらにこう続けたという。

田中は生意気だ。アメリカの手の中で中国との国交を正常化させるならばまだしも、アメリカを差し置いて国交を正常化させるとは、田中くらいはいくらでも変えられる。

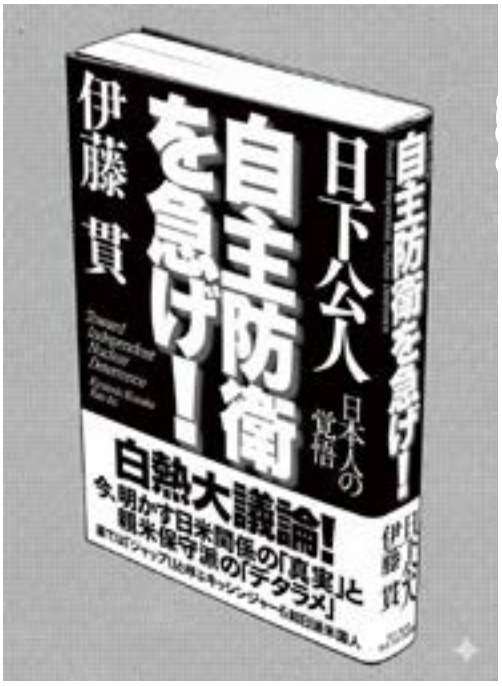
2016年、元大臣の石井一氏も書籍『冤罪』書籍を書いている。

（田中角栄氏を）はワナにはめられた。ロッキード事件は冤罪だった。

くだらない陰謀論や
都市伝説を信じるような、
そんな人物ではない。

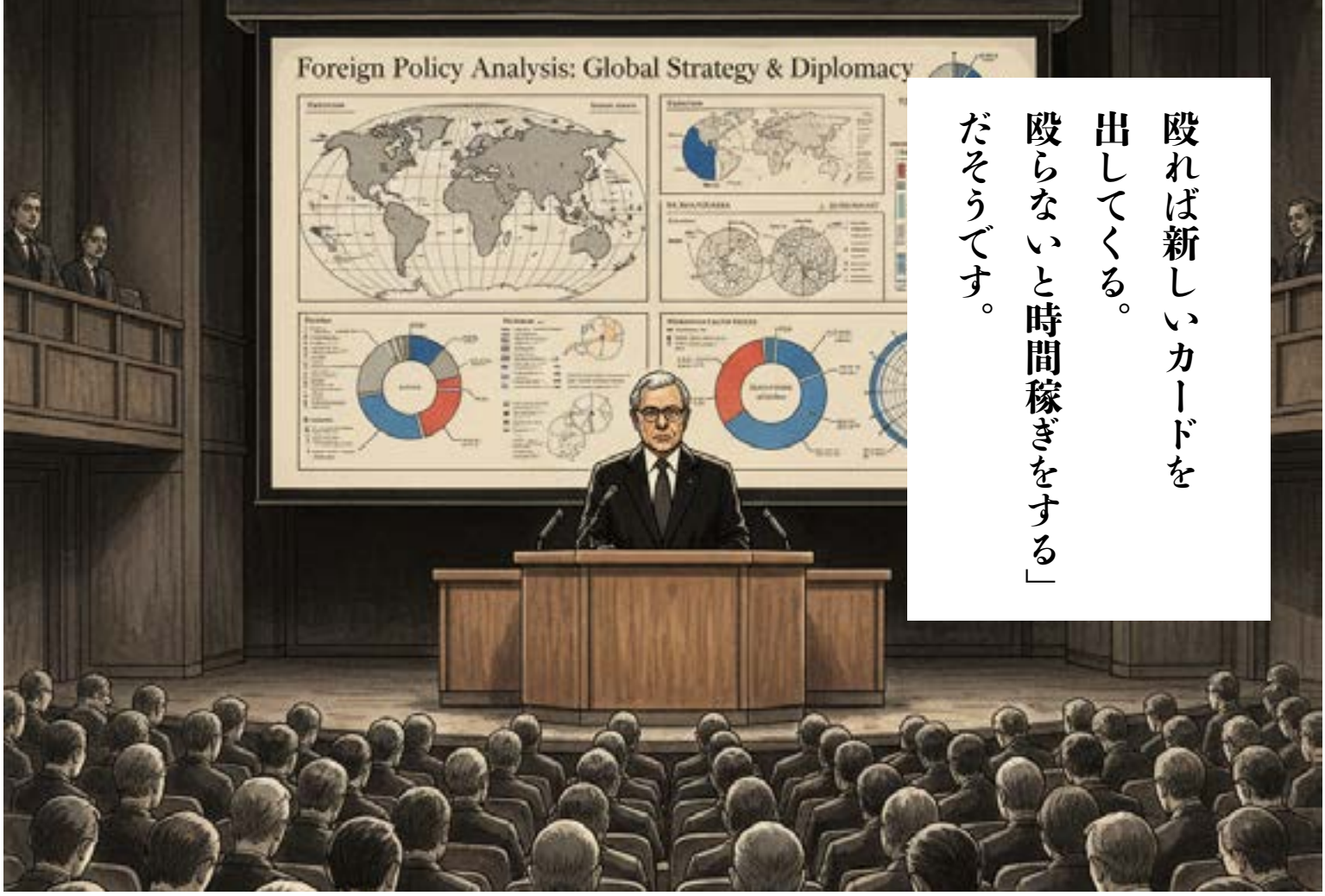
東大を卒業され、
多摩大学の名誉教授でもある
政治評論家の日下公人氏は、

その彼が、
キッシンジャーについて、
『自主防衛を急げ！日本人の覚悟』
という書籍の１０３ページで、
こう述べている。



キッシンジャーは退官後、
１回５００万円くらいで
講演をたくさんしたが、
一番人気があった題目は
「日本から儲ける方法」
だったそうです。

その答えは「まず殴れ」で、
その理由は
「日本人はサラリーマン
ばかりだから
自分の意見がなくて、



「まず殴る」
そんな考えのもとに、
田中角栄は失脚し、

『雨の牙』という小説がある。
主人公のジョン・レインは、
日本人の父とアメリカ人の
母を持つ
日系アメリカ人で、

CIA工作員であり、
そして
暗殺者でもあった。

この小説に対して、
翻訳家であり、
またジャーナリストでもある
マーク・シュライバーは、
次のように書評を書いた。

東京は、電話が盗聴され、
スパイが銃を撃ち合い、

電車に乗る時には
必ず自分の背後を
確認する必要がある
危険な街である。

これは真実である。

平穏無事に暮していると、
東京は安全な街に見えるが、

真実は違う。

『日米合同委員会』
実はこここそが、
日本の権力の中枢である。

「『日米合同委員会』で決定したことは、日本の国会、内閣、裁判所の三権を超越し、『日銀』をも動かしている」と言われている。

いくらなんでも裁判所から内閣、国会までなんて信じられない！そう考えて当然だが、

ではなぜ田中角栄は逮捕されて、

石井紘基の暗殺の真相は、未だに明らかにならず、

中川昭一は、酩酊会見を行い、その半年後に亡くなったのか？

実はこうしている今も、
日本に対して
内政干渉が行われている。

なぜなら先の大戦が、
日本の侵略戦争ではなく、
ペリー以来の目的を達成した、
彼らの金融侵略だったからだ。

では、日本はどのようなカタチで、キャッシュレスペンサーと化しているのだろうか？

それは結局、究極の税金の無駄遣いと言える。

たとえば日本の防衛費は、
5兆円から7兆円へと
上がりつつあるが、

しかし厚生労働省の予算は、
一般会計だけでも、
34兆円である。

また、コロナ予備費だけでも、
国防費を上回る11兆円が
行方不明になっている。

コロナパンデミック
の到来と共に、
販売中止になった抗癌剤
「ペグイントロン」は、
たった1グラムで、
3億3170万円だ。

このダイヤモンドより、
はるかに高い抗癌剤を、
60万円ほど払って、
マイクロミリグラムで
多くの日本人が、
投与しているのである。

製薬会社は大儲だ。

だが、その一方で、
日本では年間
約40万人、
1日に千人の人が、
癌をキッカケで
亡くなっているのである。

ちなみにもともと
抗癌剤は、
第一次世界大戦中に
ドイツが兵器として
開発した
「マスタードガス」
という毒ガスである。

その後の抗癌剤も、
基本的には
「細胞分裂を抑える」
という強い劇薬毒物であるため
抗癌剤の取り扱いは、
基本的に手袋やマスク、
ゴーグル、キャップなど
防護具を使用する。

私の盟友でもあった
癌の専門医、
故・宗像久雄先生は、
こう述べる。

去年、約４０万人の
日本人が癌で亡くなった
けど、癌の専門医として、
「一人も死ぬ必要はなかった」
と断言する。

日本人は殺されてるよ！
「Good morning, everybody!」
皆さん、起きて！

癌の三大療法

癌の専門医261人に対して、
「自分が癌になった場合、
自分が行っている癌治療を
受けるか？」
と質問したところ、
260人が
「受けない」と答えた。

癌の専門医は知っているのだ、
日本の癌治療が、
治る確率が低く、
そして苦しく悲惨であることを。
そして宗像先生のように、
儲からない代替治療を
訴える声は、
簡単に書き消され、

抗癌剤等によって、
製薬会社を大儲けさせる
医療ばかりが、
もてはやされているのだ。
↑癌治療について知りたい方へ

税金が上がり続ける一方で、
ワンルームの部屋に、
まるで100万円もする
超高級テレビを
何台も置くかのように、

様々な分野において、
税金の無駄使いをすることで、
私たち日本人は
キャッシュディスペンサーと
化しているわけである。

日本が植民地であるという、
れっきとした物的証拠がある。

その物的証拠とは、
国際法では、
「他国に対して強制的に
介入してはならない」
と内政干渉が固く禁じる
文章があるが、

しかし実のところ戦後八十年、
ずっと日本は、
内政干渉され続けてきた。

日本が植民地であり、
日本が内政干渉されてきた
その証拠とは、

規制改革要望書

日米規制改革および競争政策
イニシアティブに基づく
日本政府への米国政府要望書

2001年10月14日

Annual Reform Recommendations
from the Government of the United States
to the Government of Japan
under the U.S.–Japan Regulatory Reform and
Competition Policy Initiative

October 14, 2001

アメリカから突き付けられてきた
「年次改革要望書」
である。

この内政干渉によって、
「派遣法」を変えさせられ、
それまで禁止されていた
製造業でも
派遣社員を
使えるようになり、
急激に正社員が減って
派遣社員が増えた。

激増した派遣社員の存在、
それによる「貧困」の拡大、

「貧困」の拡大に伴う、
犯罪等の「悪徳」の増大、
実はこれは
偶然の産物ではなく、
心邪悪なる者たちによる、
内政干渉の賜物なのである。

都市伝説でも何でもなく、
日本はアメリカから、
「年次改革要望書」を、
突き付けられることによって、

郵政民営化を行い、
「派遣法」、「会社法」の
改悪を行わさせられることで、

「ディープステート」
と呼ばれる者たちを、
を儲けさせる代わりに、

日本人は日々、努力しても、

働いても、働いても、

貧しくなり続けているのだ。

「年次改革要望書」は
2009年に無くなったが、
2011年に
「日米経済調和対話」
というカタチで復活している。

実は世界には
「貧困」と「悪徳」を
望む悪い者たちが
現実に存在しており、
彼らこそが日本を
アメリカを通じて、
金融植民地にしているのだ。

それが本書が、
「霊界戦争」
と題している、
理由の一つでもある。

たとえば18世紀に、
マルサスという
経済学者がいて、
彼は『人口論』という
書籍の中で
次のように述べている。

人類の人口は、
人間の持つ本能によって、
急速的に増加するが、

しかし食糧は、
それほど増加することはない。
そのために人口増加によって、
食糧不足に陥ることは、
もはや歴然である。

しかし「貧困」は、
死亡率を高めて
人口を減らす要因となり、

さらに「悪徳」も、
出生率を低める予防になる。

よって「貧困」と「悪徳」は
認められるべきである。

「日本人は
サラリーマンばかり
だから、まず殴れ」
と述べた
キッシンジャーと同様に、

アメリカ政界で、
多大な権力を持っていたのが、
ズビグネフ・ブレジンスキーだ。

QRコードから、
↑この動画で
ご覧になってもらえれば、
よく分かることだが、
彼はこう述べていた。

全ての人類史で初めて、
人類は「政治」に対して
目覚めてきています。

これは新しい現実です。

これまでの時代では、
百万人を誘導することは
簡単だったのです。

しかし今日では、
百万人を誘導するよりも、
百万人を殺すほうが
限りなく簡単なのです。

そのブレジンスキーは、
『Replacement Migration
（代替移民）』
と題された国連報告書
の中で、こうも述べている。

日本は毎年、
数十万の移民を
受け入れるべきだ。

世界では今、
「難民」、「移民」が、
大問題になっているが、

実はこの問題の陰で、
暗躍を続けてきたのが、
「自己資産2兆円」と言われる
世界最大の投資家
ジョージ・ソロスである。

ジョージ・ソロスの
『オープン・ソサエティ財団』が、
「人権」という美名を謳い文句に、
難民・不法移民の支援を
行ってきたわけだが、

国境の存在は
邪魔者であり、
国境を撤廃して
人々が欧州に入れる
ようにすべきだ。

ソロスが設立した
『オープン・ソサエティ財団』
こそ、世界中における
移民・難民問題の背後で
暗躍してきた。

イギリスの首都ロンドンでは、
すでに白人は少数派だ。

その証拠に、
ロンドン市長の
サディク・カーン氏は、
欧州連合加盟国の
首都の市長に当選した
初のイスラム教徒である。

イスラム教徒の儀式の一つ、
「イフタール」という
ラマダン（断食）開けの
食事の時には、
ロイヤル・アルバート・ホール
というイギリスの歴史的な
劇場はイスラム教徒に占拠された。

同じようなことは、
イギリスのみならず、
ドイツでも、

フランスでも、
ヨーロッパ中で起きて、
そして文化の違いから、
様々な軋轢が生まれている。

第二次世界大戦開戦時の
米大統領ルーズベルト、
ヘンリー・キッシンジャー、
ズビグネフ・ブレジンスキー、
そしてジョージ・ソロス、

この四人の共通点は、
アメリカ国籍であることと、

それともう一つ、
「自分たちはユダヤ人だ」
と首相していることだ。
彼らの愛国心は、
本当にアメリカに
向いているのか？
日本

もちろんユダヤ人は、
加害者ではなく
被害者である。

しかしディープ・ステートに
ついて考える時、
「ユダヤ」を無視して
考えることはできない。

「過去、現在、未来にいたる
すべての出来事が記された
霊界に存在している」

と古から言われている
伝説の図書館、
「アカシック・レコード」、

千八百年前の2世紀、
ギリシャのエーゲ海にある
パドモス島のヨハネは、

「アカシック・レコード」
に触れたと言われる。

そして彼は『新約聖書』の
「ヨハネの黙示録」を記した。

その「ヨハネの黙示録」には、
2章9節と3章9節の
二回にわたって、
「終末の時代にユダヤ人を
自称する悪魔教徒が現れる」
ということが記されている。

そして実際に彼らは、
ユダヤ人を自称しているし、
次のエピソードで詳しく話すけど、
世界には本当の本当に、
悪魔教徒たちが、
存在しているんだ。

「蛇のように賢く、
鳩のように素直になりなさい」
かつてイエスはそういった。
私が貴方がたつかわすのは、
羊を狼の中に送るようなもの。
だから蛇のように賢く、
鳩のように素直でありなさい。
「マタイの福音書」10章16節

「エデンの園」において、
悪魔が蛇に化けて
イブを誘惑したことから、
聖書の世界で蛇は、
とても嫌われてきた。
それでもイエスは、
「蛇のように賢くあれ」
と言った。

つまりイエスは、
「神へは常に純粋に、
しかし
狡猾な悪魔は見破れ」
そう述べたわけだ。

そして日本にも今、
中国移民、
在日朝鮮人、
クルド人問題、
さらには、
アフリカ移民まで始まり、

そして文化、
教育などの違いから、

確かに
北海道から沖縄にまで、
「移民問題」が
すでに勃発している。

2025年8月21日に開催された「アフリカ開発会議（TICAD9）」の公式イベントにおいて、日本の愛媛県今治市、千葉県木更津市、新潟県三条市、山形県長井市の四つの市が、アフリカ諸国の「ホームタウン」に認定されたことは、揺るぎない事実だ。

しかし、ナイジェリアの殺人件数は、日本の94倍であり、誘拐事件にいたっては、1000倍にもなることも、事実である。

父をナイジェリア人、
母を日本人に持つ
ボクシングのスーパーライト級の

元チャンピオン
細川バレンタイン氏は、
こう語っている。

ナイジェリアで
高速道路を走ったら、
必ず人の手や人の足が
落ちている。

たとえばお腹が空いて、
ひもじくて、
トマトを盗んだ場合、

市場の大勢の人々が、
盗みを犯した者を
捕まえて、

皆でボコボコにして、
タイヤを体の上から
はめて焼き殺すという。

しかも焼かれた死体は、
あえてそのまま放置して、
見せしめにするという。

警察が盗んだ犯人を
射殺することもあるが、

しかし民衆が
犯人を捕まえて殺しても、
ただ警察は横で
見ているだけだという。

「トゥクトゥク」
というタイなどをはじめ、
東南アジアで
広く利用されている
三輪自動バイクがあるが、

「トゥクトゥク」の
後部座席に女性が乗って
カバンを持っていたら、
腕ごと切って、
盗むこともあるという。

「こうした一連の話を知れば、
「高速道路を走ると
人の手や足が落ちている」
という話の意味が理解できる。

教育水準、経済事情が、
あまりにも違い過ぎるのだ。

細川バレンタイン氏曰く、
クルド人のヤバさが「1」なら、

ナイジェリア人のヤバさは
「100」だという。

まだナイジェリア人が、日本に入ってくるとは、限らないじゃん。

そういった感想を持つ人も、いるかもしれない。

確かに外務省は、「アフリカ・ホームタウン計画」を発表して、

抗議の電話が殺到したために、一か月もしないうちに、撤回することを発表した。

「ただ『ホームタウン』という名称は使わないだけで、

今後も、アフリカ諸国への支援は変わらずに続けていくという。

ここで重要なカギを握るのが、
先ほど紹介した、
ソロスが設立した
『オープン・ソサエティ財団』
である。

なぜなら
『オープン・ソサエティ財団』は、
『JANIC（ジャニック）』
という国際協力NGOを
援助しており、

実はこの『JANIC』こそ、
活動のテーマに、
「移民・難民の権利」
ということを掲げて、
「クルド人問題」に、
深く関わっているからである。

見よ、サタンの会堂に属する者、
すなわち、ユダヤ人と自称してはいるが、
その実ユダヤ人でなくて、
偽る者たちに、こうしよう。

『新約聖書』ヨハネの黙示録３章９節

しかも、
これもいずれ
詳しく述べるが、
このまま中国移民が
増え続ければ、
人数は力となり、

すでに国内にも、
「外国人参政権」を
認める政治家、
政党も多いために、
やがて日本は
滅んでしまうだろう。

国連が推奨する『SDGｓ』も、世界の「移民」「難民」の問題に深く関係している。

1. 貧困をなくそう

8. 働きがいも経済成長も

10. 人や国の不平等をなくそう

❼計画に基づき良く管理された移民政策の実施などを通じて、秩序のとれた、安全で規則的かつ責任ある移住や流動性を促進する。

そして「移民問題」、「SDGｓ」を追求すると、必ず出てくる組織が、『WEF（世界経済フォーラム）』だ。

この組織は、
世界的な民間組織だが、
しかし世界各国に対して、
かなり強い影響力を持ち、

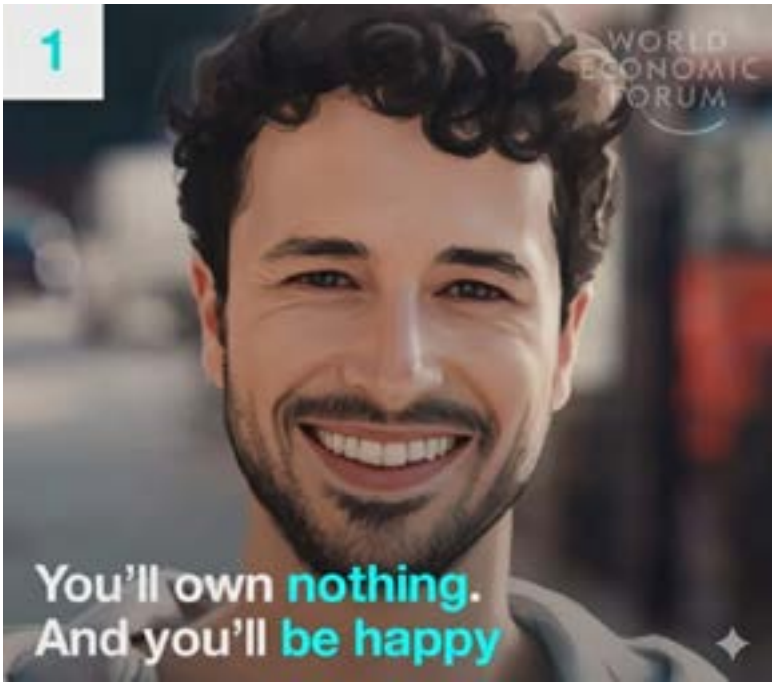
そして
地球のリセットを目指して、
「グレート・リセット」
ということを掲げている。

『WEF』が、
単なる民間組織ではない、
その証拠として
2022年1月18日、
岸田元首相も
オンライン会議に出席して、
こう述べている。

今、我々は、
Great Reset の先の世界を
描いて行かなければなりません。

Special Address
Kishida Fumio
Prime Minister of Japan

『WEF』は2016年に、2030年までの、8つの予測を公開しているが、その最初が、



何も所有していません。
車も家もありません。
家電製品も服もありません。
でも幸せです。

と、いきなり私有財産の廃止を強調している。

この組織が移民を力強く後押ししており、日本は滅びの危機を迎えている。

地球は今、『WEF』によって、「グレートリセット」が、進行中であり、

つまり現在の日本にある
移民・難民問題の根本原因は、
日本政府の奥の奥にあり、

それは結局、
戦後の日本が、
金融的植民地であり、

ずっと我々が
奴隷状態だからだ。

正しいことを
正しいと言えない
間違っていることを
間違っていると言えない、
正々堂々と自分の意見を
言うことができない、
それでは奴隷と
同じではないか！

しかも日本が、
移民を受け入れようとしている
理由の一つが、
「働き手不足」だという。

これでは、
「働く外国人の人生など、
少しも考えてはいない」
ち言える。

そもそも日本には、
約150万人の
引きこもりがいて、

それ以外にも、
「ワーキングプア」と言って、

働いても食べていく
ことがやっとで、

すでに結婚や子育てを
あきらめている人も多い。

その最大の理由に、
上がり続ける税金によって、
長びいている不況でもあるし、

また、派遣社員が増えて、
労働環境が悪化したことも、
やはり原因の一つだ。

いずれ詳しく述べるが、
実のところ日本で、
税金が上がり続ける理由は、
もちろん一つには、
財務省も原因ではあるが、

しかしその上に君臨している、
『日米合同委員会』、
さらにはディープ・ステートが、
「貧困」と「悪徳」を
望んでいることが原因である。

このままでは、
日本は増税が繰り返され、
物価や光熱費も上がり続けて、
日本人の弱体化にともなって、
増え続ける移民によって、
日本は滅んでしまうだろう。

しかしそもそも問題は、
武士道が解体されたことで、
日本人から
侍精神が失われているからだ。

たとえば
「マリア・ルス号事件」の時、
相手国の船長から、
日本はこう言われた。

遊郭に売られている
娼妓は、
人身売買ではないか！
こんなことを
認めている日本が
他国の人身売買を
責められるのか！

江戸時代から明治となった
貧しい時代、
遊郭に売られて、
体を売っている女性たちがいた。

彼女たちに自由はなく、
給料は借金のカタにされるため、
給料も無く、

まさにそれは、
「人身売買」
と言えるものであった。

こうしたことを
外国から指摘された
武士道の国・日本は、

即座に
「娼妓解放令」を出した。

この解放令によって、
遊女たちの借金は、

すべてチャラとなり、
彼女たちは自由の身となった。

しかし今はどうだろ？
新宿大久保病院の周囲では、
学費のため、生活費のため、
ホストへの借金返済ために、
日本の女性たちかが、
立ち並んで体を売っている。

しかし私たち日本国民は、
この悲しき現状を、
結局、何も打破できず、
結果的に、
黙って見過ごして
しまっている。
これでどうして、
現代の私たち日本人に、
愛の想いから戦う、
武士道精神があると、
言い切れるだろうか？

これこそまさに、
武士道の国が、
奴隷国家となってしまった、
その象徴ではないだろうか？

こんな話がある。

奴隷は、
奴隷の境遇に慣れ過ぎると、

驚いた事に
自分の足を繋いでいる
鎖の自慢を始める。

どちらの鎖が光っていて
重そうで高価か、などと。

そして鎖に繋がれていない
自由人を嘲笑さえする。

だが奴隷達を
繋いでいるのは
実は同じ鎖に過ぎない。

しかし奴隷は
どこまでも奴隷に過ぎない。

悲しいことに、
私たちは、
奴隷状態の日本の中で、
「自分たちは自由だ」と、
ただ勘違いを続けている
だけなのだ。
109

しかもかつての日本人は、
十五歳で大人として、
命を懸けていたというのに、
命を懸けていたというのに、

愚かにも私は、
十五歳くらいから、
「喧嘩」などという暴力に
価値を見い出して、
仲間同士で、
戦いを続けてきたのだ。

たとえそれで
「東京最強」
「関東最強」
「平成最強」
と呼ばれたところで、
それは結局、
「奴隷の最強」
にしか過ぎない。

だから私たちは、
自分たちの国を、
キャッシュディスペンサーの状態、
すなわち金融植民地から
解放するためにも、

新たな奴隷解放を
行わねばならないのだ。

では、
どうすればいいのか？

アメリカ海軍大将
レイモンド・スプールアンス
という方は、
戦後に行われた講演の中で、
次のように述べた。

「日本人は状況が
絶望的になっても
決してあきらめず、
内部で反乱も起こさず、
文字通り最後の
一兵になるまで戦った。

あの様な若者が大勢いる限り、
日本は必ず不死鳥の様に
甦るだろう」

アメリカの軍人が
述べているように、
私たち日本人は、

きちんと努力さえすれば、
不死鳥のように、
日本を甦らせることができる。

では、
それはどんな努力か？

大西瀧治郎海軍中将、
彼こそ
「特攻隊の父」
と呼ばれている。

しかしこの大西中将は、
「特攻」に対して、
「統帥の外道」と称していた。
つまり「特攻の父」が、
「特攻とは軍隊を指揮する上で、
道から反れた作戦である」
そのように述べたわけだ。

しかし『一億人の昭和史3』には、
「特攻の父」大西瀧治郎について、
海軍に従軍していた
毎日新聞記者の新名丈夫
という方の貴重な証言がある。

大西は
「戦争は負けるかもしれない。

しかしながら
後世において、

われわれの子孫が、

「先祖はかく戦えり」
という

歴史を記憶する
かぎりは、

大和民族は断じて
滅亡することは
ないであろう。

われわれはここに
全軍捨て身、

敗れて悔いなき戦いを決行する」
と話していた。

つまり特攻の目的とは、
「第一には敵艦を叩くことであり、

第二には侍の強さを見せつけて、
米兵の戦意を削いでしまい、

日本分割案を退け国体を護る」
ということでもあったけれども、

実はそれだけではなく、
「第三の目的として、
子孫に対して、
先祖がいかに戦ったかを
教えることで、
日本が滅びないようにする」
というさらなる大目的も、
含まれていたわけである。

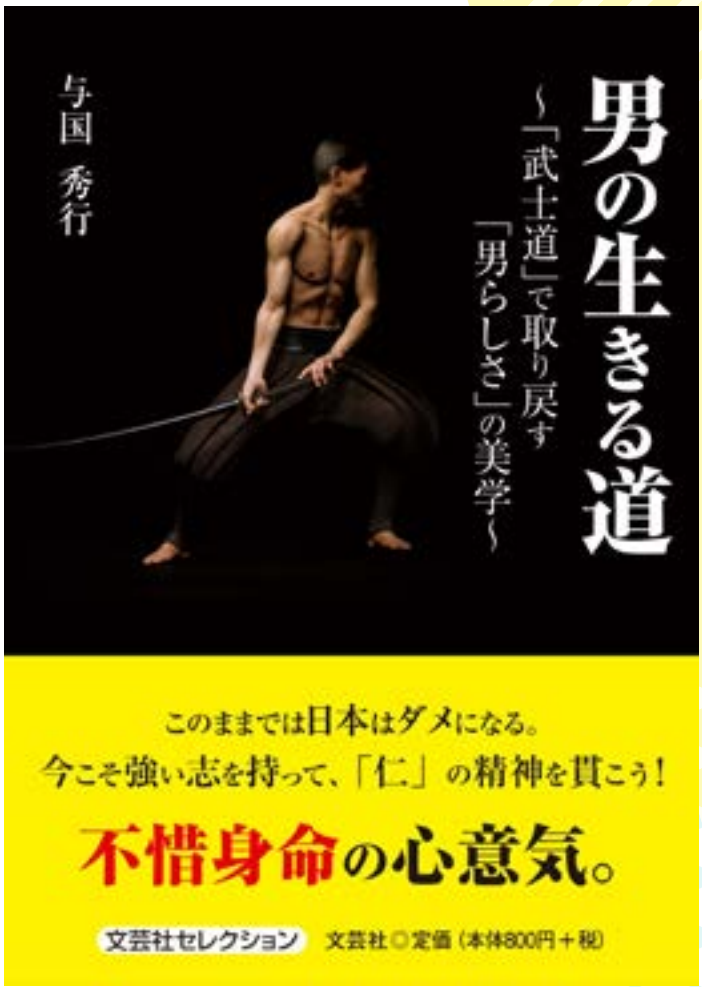
すなわち特攻攻撃は、
そして私や貴方の心に目がけても
行われていたのである。

だからこそ私たちは、
「特攻の真意」を知って、
今こそ大和魂を
甦らせるべきなのだ。

与国 秀行　最新刊

Amazon で販売中！

電子書籍 1.500 円



文庫本 880 円

その他にも オーディオブック
『武士道を行く』→

←与国秀真作詞『BUSHIDO42』